

愛媛大学教育学部

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail : dosokai.ed.ehime@gmail.com



コロナ禍



高橋 治郎

愛媛大学教育学部
同窓会会長

同窓会会員の皆様、お変わりございませんでしょうか。現在、世界中が新型コロナウイルスの大流行で外出禁止や休業要請、三密を避けよ、などと騒然としています。感染者数が減少したので、経済活動を再開した国もあります。が、まだまだ、感染者数、死者数が増え続けています。私はストレスが溜まり、発散できず困っています。皆様はいかがでしょう。我が国においては、高齢者の介護施設や病院での集団感染者がでるなか、四月十六日に全国に緊急事態宣言が出され、五月十四日には条件付きの愛媛県を含め三十九県の緊急事態宣言が解除されました。残る東京都や大阪府など八都道府県も近々解除になるものと思います。二月二十七日以来、小・

中・高の各学校をはじめ大学も休校を余儀なくされましたが、どこにか分散登校、時差登校というところになっていきます。街の人出も大分増えてきました。もう少しの辛抱でしょうか。

この新型コロナウイルスの流行で、愛媛大学も三月の卒業式、四月の入学式は中止となりました。卒業生には例年どおり記念品と同窓会報、住所届けなどを学位記とともに郵送してもらっています。ただ、卒業式や修了式がなかったことを残念がっていました。……彼、彼女らも晴れて教育学部の同窓会会員となりました。教育界はもとより、各方面での活躍を期待しています。

入学式も中止を余儀なくされ、その後、ガイダンスや健康診断が行われたのですが休講、キャンパス内立ち入り禁止、そしてオンライン（遠隔）授業へと、これまでに経験したことのない授業形態に進みつつあります。オンライン授業の準備に教員は苦労していますし、学生、院生にとってもオンライン授業を受ける環境が整っていない者がいるなど課題は山積みです。また、学生や院生にとってア

ルバイトが出来ないということが、大学生活の断念、すなわち退学を考えざるを得ないところにまで追いやっていきます。ただ、困窮している学生、院生に大学や国は現金給付などの支援を表明しており、学業を諦めなくてすみそうです。手厚い支援をしてほしいものです。

ご承知のように今年二〇二〇年は、東京オリンピック、パリリンピックが開催される年でした。新年を迎えたときは、バラ色の年の待ちに待った年だと思っていたのですが、コロナ禍のためオリンピック、パリリンピックは来年に延期になりました。もともとも来年、出来るかどうかはわかりませんが……。また、春の選抜高校野球の中止をはじめプロ、アマをとわず野球、ラグビー、サッカー、テニス、ゴルフ等々のスポーツや成果発表会、演奏会や演劇、各種文化行事も開幕延期や大会も中止となりました。寂しい限りです。こんなことは、これまで経験したことがありません。どう対応してよいものか、戸惑うばかりです。

教員として児童・生徒と関わっている皆さんは、前年度三学期の授業のやり残しと新学期開始の遅れで頭の痛いことだと思いませんか。いつから通常の授業が出来るようになるかがわからない状況にあって、分散登校や三密を避けるための対応等々を含め、今後の授業や学校行事の計画を練り直すのに大変なご苦労をされていることでしょう。新任の先生方にとって

はなおさらのことと拝察いたします。こういう非常時ですので、各学校で人手が要ると思います。教員を最近退職された、まだまだ元気な人が大勢います。こうした退職教員に協力・援助を仰ぎながら、この難局を乗り切らなければならぬと考えます。現職の教員だけでは、このコロナ禍最中の、そしてこれからの学校運営は出来ないと考えます。多くの教職員は、必ず身体を壊します。十年免許更新の年に当たっている教員もいるのです。現在収まりつつあるように見える感染者数が、いつ増えだした第二、第三の波が来るかわかりません。新型コロナウイルスのワクチンが開発され、使えるようになるには時間がかかります。財政難とはいえ、この難局を乗り切るためには、臨時に教員を各学校に配置し、学校運営をするしかありません。教育委員会が一刻も早く、臨時教員を各学校に配置し、対応してくれることを祈るばかりです。

このコロナ禍のため、同窓会の運営、常任理事会や理事会、支部長会などが予定どおりには開催できないため、文書やメール等で連絡を取り合っています。そうした中、二年に一度八月に開催されています、今年の同窓会懇親会中止せざるを得ないということになりました。楽しみにしていた会員の皆様には本当に申し訳ございません。

どうぞコロナに感染することなくお元気でお過ごしください。収束までもう少しです。

目次

表紙

- 「みのりの秋」……………川端 信吾
- 題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
- 「コロナ禍」……………(1)
- 教育学部同窓会会長 高橋 治郎
- 心 響……………(2)
- 「疾風に勁草を知る」
- 愛南町・僧都小学校校長 若松 隆仁
- 研究室紹介……………(3)
- 教育学部技術教育講座 森 慎之助 研究室
- 学部トピックス……………(5)
- ・教育学部の学生が上島町立弓削小学校・生名小学校を訪問し、授業参観を行いました
- ・教育学部でワークショップ「投票に行こう！」を開催しました
- ・教育学部の在学生・卒業生が、「第43回全日本アンサンブルコンテスト」に出場することが決まりました
- 職場だより……………(7)
- ・教員生活スタート
- 新居浜市・川東中教諭 河野 司
- ・「感性」と「熱」を大切にして
- 今治市・清水小教諭 宮下優祈子
- 成長
- 松山市・生石小教諭 俊成 美里
- ・子どものために……
- 砥部町・広田小教諭 土手内聡太

疾風に勁草を知る

愛南町

僧都小学校校長

若松 隆仁

(昭和三卒)

まさに国難です。新型コロナウイルス感染症による非常事態宣言は解除されたものの、現在、やっと学校再開にこぎつけたところで、この約四か月間を振り返ると、「こんなことが起きようとは」という思いが今もぬぐえません。今回のコロナウイルス感染症への対応は、三十三年の教員生活の中で初めてのことであります。六年生児童に、卒業式中止を告げた際は、まさに忤怛たる思いの中で宣告でした。結果的に縮小した形で式は実施したものの、学年末、さらに学年始めという貴重な時間を失わせてしまったことは、誰を恨むわけにもいかないとはいえ、大変辛いことでした。まだまだ今後も予断は許しませんが、コロナウイルスの渦の中で思うことを綴ってみます。

凡事徹底

この言葉は、学校現場ではよく耳にします。そして、我々は子どもたちに対しても指導を徹底するように心掛けます。今回の騒動で、手洗い・うがいなどの「凡事」を「徹底」することができるようになりました。毎冬、インフルエンザの流行する季節になると同じ事を訴えるにもかかわらず、今回

ほどの徹底はできていませんでした。毎年毎年同じことを訴えながら、なぜ今回は徹底できたのでしょうか。その理由の一つは「恐怖」でしょう。「かかったら死ぬかも知れぬ」という思いが人々を動かしたのだとすれば、人を動かすには恐怖が必要なのでしょう。だから、学校には怖い先生が必要なのでしょう。もし、人を動かすものが怖さだけとしたら、あまりにも悲しい、そう思うのです。人は怖さによって動く側面はある。それは否めないとしても、それだけだとしたら、悲しいし虚しい。怖さを感じさせることなく、子どもたちを動かす。子どもたちのやる気のスィッチを入れる。そのことを求め続けなければ教育の敗北ではないか。そんなことを考えます。

子どもたちの学びは止まっていたのだろうか

現在も九月入学についての議論はかまびすしいものがあります。その是非を述べたいわけではありません。九月入学賛成の訴えの中に「学校に通えない時間に、学びに空白がでたり差がついたりしてしまうことは良くない。だからもう一度リセットするように九月から一年をスタートしてはどうか。」というようなものがあります。今回の長期の休業中に、子どもたちの学びは本当に止まっていたのでしょうか。この休業中に、ある母親から、子どもが練習を重ね、逆上がりができるようになったという動画が送られてきました。また、ある子は、折り紙を

使った大作の万華鏡を仕上げたと連絡してきました。自分で、あるいは親子で目標を立て、それに向かって手立てを工夫し、こつこつとねばり強く努力を重ね、何かを達成する。何かを作り上げる。そのような活動をしている子どもたちがいました。学校での国語や算数の授業はできなくても、そこに「学び」は確かにある。そのような学びこそ、今しかできない学びであると思うのです。親子で一緒に料理をしたり、お手伝いをしたりする中にも貴重な学びの機会があったはず。学びとは一体何か。しかも、今しかできない学びとは。その学びこそが、大切なものでもあると思うのです。



できないを嘆かず、やってみる

長引く臨時休業の中で、子どもが学校に来られない中で、「だめだ、できない。」と思うことも多くありました。変えられない状況があり、制約もありました。しかし、それでも、何かできないか、やってみようじゃないか、と職員と知恵を出し合いながら取り組みました。動画配信に挑戦したり、S N

Sへの働きかけを行ったりもしました。デジタルへの取組だけではありません。往復葉書を使って子どもに呼び掛けたり、葉書の書き方を伝えたりもしました。確かに、本校のような極小規模校は機動力があり、できることが多くあります。全保護者の協力を得られやすい状況もあり、挑戦を続けることができました。「それ、おもしろそう。」「やってみましょう。」という職員にも恵まれて創意工夫を重ねました。もちろんうまくいった取組ばかりではありません。でも、どれもこれも、やってみて分かることです。挑戦に失敗はつきもの。トライ＆エラーを重ねながら、一歩でも進もうとするその姿勢こそが大切なのだと信じています。

勁草でありたい

無知を晒すようで恥ずかしいのですが、「疾風に勁草を知る」ということわざを今回の騒動の中で知りました。まさに激しい風が吹き荒れている状況下です。その中でこそ勁草であるかどうか問われます。または、勁草になれるかどうか判断されます。疾風に負けないためには、しっかりと根が必要。また、しなやかな茎も必要です。どこに軸を置いてあるかという自らの哲学。そして、変化を受け入れる柔軟な姿勢。そのいずれが必要なのでしょう。このコロナウイルスの疾風が過ぎ去った後、勁草となり得ているか。いや、勁草になろうとしているかどうかというのを、自らに問い続けなければならないと思います。

・大切なこと	水野 公貴
鬼北町・日吉中教諭	
・三十二才の今、思うこと	
愛媛大学教育学部附属中教諭	
葉師神吉啓	
国際理解教育コースの思い出……	(13)
・日常の日々に国際理解！	
国際理解教育コース	赤塚 鮎美
・国際先生から学んだ国語や古典が好き	
国際理解教育コース	真木のどか
愛媛大学からのお知らせ……	(16)
先輩を偲ぶ……	
「あしあと(3)」先輩たちのあしあと	(17)
会員の声……	同窓会事務局
・「能の世界」	(19)
愛媛大学元教職員	河野真知子
・「菩薩道的教育哲学の構築へ」	
「教行信証」に学ぶ――	
吉原 宏文	(23)
部活動紹介……	
愛媛大学演劇研究会	
校友会ニュース……	(24)
事業・決算報告・役員表……	(27)
表紙作品「みのりの秋」について……	(11)
放送大学・ホームカミングデザイン案内	(25)
同窓会支部長会報告……	(26)
祝・叙勲……	(26)
寄付者名・敬弔……	(29)
同窓会事務局からのお知らせ……	(29)
裏表紙……	(31)

研究室紹介



愛媛大学教育学部

技術教育講座



教授 森 慎之助 先生

●簡単な自己紹介

昭和六十年に愛媛大学大学院工学研究科を修了し、その年に国立新居浜工業高等専門学校金属工学科助手として採用されました。六年間在職し、ご縁をいただき、平成三年に愛媛大学教育学部技術教育助手として着任しました。今年度で三十年目を迎えます。新居浜高専に在職中は愛媛大学工学部の恩師と共同研究を行っていたので、学生時代を含めると四十一年間、愛媛大学と一緒に過ごし、昭和・平成・令和と共存していることになります。

●技術教育講座の教員

着任した当時は私を含め六名が在籍していました。技術分野の教科内容である機械 村尾卓爾先生、山崎博司先生、電気（宮内正義先生）、情報（稲井義正先生）、栽培（石井孝昭先生）、木材・金属加工（私）に専任教員がいました。それから、定年退職、転出、採用等で八名の教員が異動し、現在は三名の教員（大西義浩先生、玉井輝之先生、私）が在籍しています。教員が半数になり、寂しくなりました。ただし、平均年齢は若返り、活気にあふれています。

●教育学部の授業

着任当時、授業は金属加工法の座学と演習、木材加工法の演習を担当しました。金属加工法の授業は高専からの継続なので、違和感なく講義・実習はできました。ただ、木材加工に関しては初めてで「どうしよう」でした。当時、技術教育講座には専任で技官（薬師寺敏彦様）の方がおられ、一年目は学生と一緒に実習を行い、加工法について教えていただきました。それ以来、木材加工については授業以外でものめりこみ、多くの木材製品のアイデアを考え、図面を描き、製作しました。そのおかげで工具、機械の使用方法を早々に習得することができ、学生に指導できる程度の知識、技能は身につきました。

また、技術教育以外に、「情報科学コース」（通称…ゼロ免コース）の授業も担当することも条件でした。こちらは新しい授業でした。授業内容を考え、教材を用意するのに四苦八苦で、自分の言葉で講義できるまで四、五年かかりました。こちらのコースは平成

●実習工場

十一年度に「情報教育コース」と改組・名称変更し、平成二十七年に最後の入学生を迎えました。現在は技術科教育法、金属加工法、木材加工法、製図を主に講義・演習を担当しています。また、令和元年度より「高等学校工業」の課程認定が認められ、免許状を取得することができるようになりました。そのため工業科教育法の講義が増えることになります。

技術教育講座が他の講座と異なるのは実習工場（金工室・木工芸室）を持っていることです。昭和四十二年に建てられ、五十五年近く経っています。学部の中でも古い建物です。十二、三年前に耐震改修工事を行いました。外観は



金属加工実習工場の様子

現在、これらの工作機械を使用して金属加工演習の製作物は、ブックエンド、文鎮、スマホスタンド、木材加工演習では引き出し付き小机です。

平成十年に免許法が変更されて教科に関する科目の授業数が以前の半分になりました。今は座学・

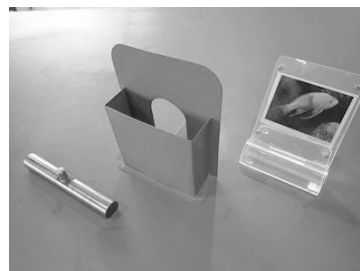


木材加工の機械

演習・実習の授業内容は最低限のものになっていきます。技術分野の授業はものづくりをとまなうものが通常であり、教員が生徒に工具や機器の使い方を見本をみせることは重要です。知識だけではものを作ることはできないことを学生に言い聞かせ、必ず実習・演習を受講するように指導しています。



木材加工の実習作品



金属加工の実習作品

●研究内容

現在は中学校技術分野に関する教材開発と授業研究を主体としています。着任時から十年ほどは材料（複合材料）を対象に工学的な研究をしていました。技術教育の在籍教員は工学部と農学部出身で、研究内容は自分の専門に特化しており、技術科教育に関しては片手間でやっている感じでした。私も自分の専門だけやっていればいいという感じでした。今は附属校園との共同研究が促進され、重要度は増しています。その当時上司に当たる先生から、附属中学校の先生方は教育のプロであるから、その領域に入っていくのは遠慮するようにと言われていました。十年近く経ち、卒業研究生がどうしても技術分野の授業実践をしたいということで、事情を思い切って附属中学校の先生へ相談に行きました。先生も興味津々で、それから学生を附属中学校へ通わせ、教材作成へのアドバイスと授業実践をさせていただきました。このことが私の転機となり、研究対象を技術分野の教材開発と授業

研究へ舵を切りました。技術分野のすべての学習範囲になりますから金属加工・木材加工にとられず機械・電気・情報・栽培領域についても関わるができます。大学では機械工学を専門で修学していたので栽培以外の知識はなんとも残っていました。技術分野では情報領域の教材に関して未開発な部分が多かったので十年近く、その領域での教材開発と授業実践を行いました。私も授業をさせていただきました。

教員養成課程において技術科という教科は中学校のみに設けられているもので、家庭科のように小学校から高校までつながっていません。周りからは、教育への貢献度が低いと見なされている雰囲気があります。大学の技術教員にとっても肩身の狭いことです。教育に携わるようになり、小学校や特別支援教育の教育現場に貢献できないだろうかと思案していました。タイミンクよく附属特別支援学校の方から声をかけていただき、それを機に作業学習（木工班）の先生方と共同で研究することが

できるようになりました。また、附属小学校においては、情報技術を利用した授業を理科、社会科、国語で実践しました。

今年度から小学校でプログラミング教育が必修となり、これまでの情報技術を取り入れた学習指導に加えて、技術教員が教員養成や教育委員会等に広く貢献できることはよいことです。

●卒業生

二十九年間で百四十三名の卒業生（技術教育講座在籍生のみ）を輩出しました。そのうち、七十五名が県内外で中学校、小学校、特別支援学校で教員として活躍しています。卒業生数は、おそらく全教科の中で言えば一番少ないと思います。この少なさが私の記憶力にはちょうど良く、卒業生の顔は私の中に残っています。最初に関わった卒業生は五十才を越え、管理職に就くようになりました。うれしいことです。ただ、管理職になると技術教員として授業をすることが少なくなるので寂しい気がします。六年前ほどから、卒業生

を中心に愛媛県下の若手の技術教員が集まるようになりました。私もその場に呼んでもらっています。技術教員同士でも少し年齢が離れると本学部出身かどうかの情報がなく、その情報がわかるだけ先輩・後輩の関係が築けて情報交換が活発になります。技術教員は少ない人数ゆえ、使用教材・指導方法など情報交換があまりなく互いに切磋琢磨していく機会が少ないのが現状です。

●さいごに

教員養成の仕事をしているうえで卒業生を教員として社会に送り出せる事は喜びであり、また、卒業生は技術教育講座の宝だと考えています。私が長年いることで、二十年以上前の卒業生と現役学生や若手教員との橋渡し役になります。これくらいしか役に立っていない気がします。私の教員生活もあと数年で終わります。それまで、中学校技術科教員、技術分野の知識・技能を生かせる小学校教員や特別支援学校教員の育成に尽力いたします。

教育学部の学生が上島町立弓削小学校・生名小学校 を訪問し、授業参観を行いました 【1月17日(金)】

学部
トピックス



令和2年1月17日(金)、教育学部の学生21名が上島町立弓削小学校（本山卓嗣校長）・生名小学校（福島聖史校長）を訪問しました。今回の訪問は、平成31年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）「キャリア形成セミナーを生かした愛大学生コンピテンシー習得と愛媛県教員育成指標達成の両立」による取組の一つで、教育学部が指定しているキャリア形成セミナー科目である「教職教養課題特講」という講義の一環です。

教育学部では、理論と実践の往還を柱とした教員養成プログラムを実施し成果を上げてきました。愛媛県内に多く存在している小規模校の実際を学び、教職の尊さや重要性を理解し、優れた教員になりたいというモチベーションをさらに高めるためのものです。

弓削小学校では、6年生が披露する伝統芸能である「雨乞い踊り」を鑑賞し、本山校長先生に「小規模校での教育実践の在り方」などについてご講話をいただきました。その後、児童とともに遊び、3時間目と4時間目に授業参観をしました。

生名小学校では、給食指導体験をし、昼休みに「上島ポップコーンの会との交流会」に参加しました。5時間目の4・5・6年生と愛媛大学生によるキャリア教育合同授業の後、6時間目には、若手の先生方3人との懇談会を行い、学生の質問に答えていただきました。また放課後には、駅伝の練習にも参加させていただきました。

両校ともに、とてもあたたかく学生を迎えていただき、帰り際には、バスが見えなくなるまで見送っていただきました。

訪問した学生からは、「先生になるかどうか迷っていたが、小学生の純粋な姿を目にし、やはり小学校という現場で子どもたちと関わりたいと感じた」「子どもたち一人一人と距離が近く、あたたかい空間である小規模校での指導方法をもっと勉強してみたいと感じた」などの感想があり、訪問した学生たちは、教員になるモチベーションがさらに高まったようでした。

教育学部では、質の高い教員を輩出することにより、愛媛県内の地域の核となる人材育成にも寄与してまいります。



6年生による「雨乞い踊り」
（弓削小学校）



若手の先生との懇談会
（生名小学校）

教育学部でワークショップ「投票に行こう！」を 開催しました 【12月24日(火)】

令和元年12月24日(火)、ワークショップ「投票に行こう！」にて、教育学部生立案の主権者意識向上のための授業「私たちと税金～今後の消費増税に賛成か反対か～」を実施し、教育学部生約150人が参加しました。このワークショップは、明るい選挙推進事業の一環として、愛媛県選挙管理委員会と愛媛大学の共催事業で行われているもので、平成27年度から教育学部が担当し、今回で5回目になります。

教育学部学校教育教員養成課程中等教育コース社会科教育専攻2回生6人が授業計画から運営、先生役をつとめました。

キャッシュレス決済のポイント還元の事例から、税金の使われ方や納税のしくみを確認した後、望ましい税のしくみについて受講生が意見交換しました。その後、会社経営者、サラリーマン、フリーター、中学生など8つの異なる立場になって意見交換を行い、多様な意見の存在について再確認しました。

愛媛県選挙管理委員会からは、先の参議院選挙でも税金のあり方が争点となったこと、自分の意見を実現する一つの場面が「投票」であることなどの説明がありました。



先生役の学生と受講生



グループでの意見交換の様子

教育学部の学生には、より高い主権者意識が求められます。また、主権者教育を推進できる教師になることも求められています。教育を通じて、地域の課題を自分たちで考え解決していくことのできる人や地域の育成に寄与してまいります。

教育学部では、今後もこのような連携により、学生の学びを支え、地域の人材育成の核となる質の高い教員養成に取り組んでまいります。

教育学部の在学生・卒業生が、「第43回全日本アンサンブル コンテスト」に出場することが決まりました 【2月18日(火)】



令和2年2月9日(日)、徳島県鳴門市文化会館で開催された「第43回全日本アンサンブルコンテスト四国支部大会」の一般の部で、愛媛大学の在学生・卒業生で構成される「パタティ・パタタ」(愛媛県代表)が金賞を受賞し、四国代表として全国大会に出場することになりました。

「パタティ・パタタ」は、教育学研究科1年の平田華奈子さん、理工学研究科2年の中吉実優さん、理学部4年の友近啓志さん、教育学部卒業生の渡井宏美さんからなるクラリネット四重奏で、メンバーは学業等に忙しい合間を縫って日々練習に励んできました。

全国大会について、平田さんは、「(課題曲は) 難易度の高い曲ですが、これからも緻密な練習を重ね、圧倒させる演奏で金賞を狙いたい。」と意気込みを語ってくれました。

職場だより



教員生活スタート



新居浜市
川東中教諭
河野 司
(令二卒)

中学一年生の頃から、漠然と目指していた教員という職業。きっかけは、中学校で出会った多くの素晴らしい先生方でした。

中学生は、心身ともに変化の大きい時期であり、私自身も、体格のみならず、心も大きく成長させてもらいました。これは中学三年間で、多くのことを先生方から教わったからです。これから、先生方との思い出や印象に残っているエピソードなどを紹介していきます。

部活動では、先輩・後輩の関係性や顧問の先生すなわち大人との接し方など、社会に出た際に必要なことを多く教わりました。また、挨拶や礼儀など、基本のことを徹底してご指導して下さいましたため、自然と挨拶ができるようになったり、礼儀を身に付けたりすることができました。顧問の先生がよくおっしゃられていた言葉で「気配

り目配りのできる人間になれ」があります。重い荷物を運んでいけば手伝うことや、元氣のないチームメイトに声掛けをするなど、普段の生活や練習の中で実践すること、試合や一つ一つのプレーにも生かされました。部活動を通して、人としての在り方や、基本的な礼儀など、多くのことを学び、成長させてもらいました。基本的なことができていれば、集団としてもまとまりができ、良いチームになるということも学ばせてもらいました。

学習面での思い出は、先生方の圧倒的な授業力でした。社会科では、世界地図や日本地図を黒板にとても上手に描く先生がいました。毎回ノートに写していくうちに三年生になった頃には、私もかなり上達しました。歴史や地理を一つ一つ丁寧に、地図などを用いて視覚的に教えてくださったので、理解しやすかったです。

中学生で教員を志し、高等学校に進学しても夢は変わらず、目標に向かって努力を続け、大学に進学することができました。

大学では、教員としての勉強が本格的にスタートし、今までに受けてこなかった内容の授業が多くありました。心理学や教職教養など、小・中・高では習わない専門的なことを新しく学ぶことがで

き、教員としての知識を少しずつ身に付けることができました。また、教育実習で、実際に現場に出て、児童生徒や教員と関わることで、学べることが多くありました。大学生活で、教育について学んだら、実習に行ったりすることで、今まで漠然と目指していた教員という仕事が明確な目標へと変化していきました。

教員採用試験も無事終えて、いよいよ教員としての新生活がスタートします。

三月の中旬ごろに、配属校が決定し、緊張しながら学校へ挨拶に行くと、なんとそこには、中学校のとき、お世話になった先生方が多くいました。特に、先ほど書いた黒板に地図をきれいに描く先生も一緒に職場で働くことになり、喜びとともにしつかりしなければと身が引き締まる思いです。教員としてのスタートを地元の新居浜市ででき、お世話になった先生方とも一緒に働くことができるのは、非常に恵まれていることなので、責任をもって職務を遂行したいと強く思いました。

四月二日には、さっそく職員会議がありました。分からないことばかりでどんどん話が進んでいきました。メモを取るのがやっとで、それが特に重要事項であるのかも分からなく、会議が進んでいった記憶があります。今までは、中学生としての学校現場の思い出がほとんどで、一つ一つの行事や学校運営などを、これほどまでに熱く長い時間をかけて会議していたとは思いませんでした。中

学生の頃、何気なくもらっていたプリントや用意されていたものなどは、先生方が遅くまで仕事をされ、準備しているものだと思いき、よく見もせずすぐに親にプリントを渡していたと考えると申し訳ない気持ちになりました。また、中学生の頃に、成績はどのように決まるのかと思っていました。その評定も細かく基準があり、その根拠をもとに成績が付けられていたのだと知り、次は私が責任をもって行わないといけないと思いました。

それからは、学級に関する用意などをして、ついに生徒との初顔合わせです。新任式中止だったため、教室で初顔合わせでした。教卓に立つて挨拶したのは、つい最近のように感じます。ついに、夢にまでみた教員生活がスタートしました。初めての理科の授業では、一年生の復習や二年生で新しく習うことの確認をしました。授業を受ける生徒にとっては、その範囲を習うのは、一生に一回であるため、責任をもって授業を行いたいと思いました。教材研究に努めて、よりよい授業ができるよう、絶えず研究と修養に励みたいと決意しました。

新学年スタートから、およそ二週間、新型コロナウイルスの影響により、休校となってしまいました。学級でようやくリズムが出てきたところの休校であったため、非常に残念でした。

学校が休校になり、少し時間に余裕ができました。そのため、教室や雑巾かけのペンキ塗り、グ



ラウンドの除草や整備など、普段は時間がなくて、なかなかできないようなことに時間を使うことができました。これらの作業を通じて、教員には、パソコンスキルやものづくりのスキルなど、多くのことができる能力が求められるのだと感じました。

授業や部活を指導している姿しか見ていなかった中学生時代。いざ、教員になり現場に出ると、思っていた何倍もの仕事量や種類がありました。その一つ一つを丁寧に、一日でも早く一教員として認めてもらえらるよう、自覚をもつてこれからも働きたいです。

学校が無事再開され、普段通りの授業や学校行事がスタートされることを願って、今できることに全力で取り組み、準備をしていきたいと思っています。

中学生の頃は、見えなかった仕事、教員になると多く見えるようになります。私も、教わったすばらしい先生方のように、中学生には見えない陰の仕事をしっかりとできる教員になりたいと思います。

「感性」と「熱」を大切にしたい



今治市
清水小教諭
宮下 優祈子
(令二卒)

美しい山々、豊かな海、温かい人々。私は、南予の愛南町で生まれ育ちました。教員である両親は、子どもたちとの楽しいエピソードを、よく聞かせてくれました。そして私自身も、いつの間にか教員の道を選んでいました。愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程小学校サブコースに進学し、教員としての道を進み始めたのです。

愛媛大学附属小学校での一か月の間の長い教育実習を終え、教員採用試験に向けて本格的な勉強を始めました。その頃、国語科の免許を取得するために、中学校での応用実習もありました。小学校教諭を目指していた私は、最初は「二週間という短い間だけ、耐え抜こう。」という気持ちでした。しかし、魅力的な先生方や生徒たちと出会い、教員を目指す上で必要な「本気」の二週間を過ごさせていただきました。

その中で、教員の資質をたくさん教えてくださった先生がいます。今でも目標にしているその先生は、実習最終日にくださった手紙に、このような言葉を書いてく

ださいました。「感性」と「熱」を大事にしてください。」私は、この二つの言葉を胸に、いつも子どもたちと関わっています。

まず、「感性」。それは、子どもの想いを感じ取り、適切に対応できる力だと思います。日々、子どもたちは私に『何か』を発信してくれます。「喜び」「不安」「怒り」「悲しみ」、そして、それらの言葉に表すことのできない複雑な「感情」を、子どものふとした言葉や表情から感じ取るために子どもを見ています。休み時間に一人である子、わざと叱られることをする子、叱られた後に笑顔で寄ってくる子……。子どもたちが私にくれるメッセージの内容も、送る方も、十人十色です。

先日、ある一人の子どもの想いに触れることができました。その子は、発表のときや、人と話すときの声の小ささが目立つ子です。しかし、家庭訪問に行くと、お母さんとは元気な声で話しているのです。お母さんも「もっと積極的になってほしい。」という願いを持っていて、私も、「何とか話す声を大きくできないか……。」と考えました。そんな中、体育の授業後に、その子が足の痛みを訴えてきました。足は何ともありませんでしたが、それがきっかけで、その日はその子の体調のことから他愛のないことまで、たくさん会話をしました。

ある昼休みのこと、よく物事を忘れてしまう私は、手の甲に小さ

くメモを書いていました。すると、横から、「先生、手に何を書いてあるの。」という声がしました。見ると、今まで、消えそうな声で話していたその子がいました。足の痛みを訴えてきたのは、「先生と話したい」という子どもの想いであり、その想いに適切に対応したこと子どもとの信頼関係が生まれ、結果的に子どもの成長につながったうれしい出来事でした。

子どもが自信を持つて話すには、相手との関係や場の雰囲気を変えなければならぬということに気付かされました。「今の表情は、どんなメッセージだったのかな。」もつとこうしていればよかったな。」と後悔することもたくさんありますが、日々試行錯誤しながら全力で子どもたちと関わっています。

学級全体に対する指導においても、どのタイミングでほめるか、どんな言葉で叱るかなど、頭をフル回転させています。また、学年主任でもある指導教員の先生や、周りの先生方の対応の仕方を観察したり、相談したりしながら、子どもたちへの適切な対応力を磨く毎日です。

次に、「熱」です。子どもに向き合う情熱、心に熱(愛情)を持つことを大切にしています。私は、経験豊富な先生方と比べると、「この子にはこんな指導をしよう」という適切な判断がまだできません。今の私にできることは、どの子どもにも愛情をもって、本気で

寄り添い、ぶつかることです。

教室の中で見ている子どもの心は、下校中の友達との出来事や、家庭での出来事など、様々な背景があつてつくられています。授業中、顔を伏せている子どもがいると、見た瞬間に叱ることがあります。後で子どもたちの心の内を考え反省することがあります。いつもと違う態度や表情に早く気づき、適切な対応のできる教員になりたいです。

初任者指導の先生は、「どの対応がよかったかは、数か月、一年経っても分からないかもしれない。でも、やってみなさい。」と言ってくれました。子どもの表面上の行動で判断するのはなく、背景や心の内を読み取って対応していきたいです。

子どもは、とても素直です。私の自信のなさや元気のなさに、そのまま反応します。子どもたちに元気がないときは、「あ、私に元気がないんだ。」と客観的に自分を見て、笑顔を意識しています。その瞬間、発表する子どもが増えたり、笑顔になったりします。

自信を持ち、笑顔で授業をするためには、日々の教材研究がとても大切であることを身に染みて感じています。新しい発見をしたとき、「分かった」「できた」という体験をしたとき、子どもたちの瞳は輝きます。私は、その顔が大好きです。日々の仕事に追われ、苦しいときもありますが、子どもたちのそんな顔を想像して教材研究

に勤しんでいます。今の気持ちを忘れず、生涯教員としての「熱」を持ち続けていきたいです。

丁寧に指導してくださる指導教員の先生や温かく指導して下さる管理職の先生方、そしてたくさん楽しい先輩の先生方に支えられて、教員生活のスタートを切りました。ご迷惑やご心配をおかけすることはありますが、いつか「一人前になりましたね」と言ってもらえるよう、また、いつか何倍ものお返しができるよう、今は自分のできることを精一杯やっています。子どもたちになつぷりの愛情を注ぎながら、子どもたちと共に、笑顔で過ごしていきます。最後に、教育実習でお世話になった先生に、いっお会いしても、「感性」と「熱」は大切に持ち続けていますと、言える教員になりたいです。



成 長



松山市
生石小教諭
俊成 美里
(平三〇卒)

時が流れるのは早いもので、私の教員生活は三年目に突入しました。右も左も分からずに、周りの先生方にたくさんサポートをさせていただきながら、何とか乗り越えた一年目。学校生活にも慣れ、視野が広がった二年目。また、昨年度は体育科の研究授業にも挑戦させていただきました。私は、小さい頃から運動が苦手でした。とくに水泳が苦手で採用試験の時にも苦労した記憶があります。小さい頃から両親の影響で音楽を聞いたり、歌を歌ったりすることが好きだったということもあり、小学生の時には金管バンド、中学・高校では迷わず吹奏楽部に入部しました。そんな音楽一筋だった私が、体育科で研究授業をすることになるなんて夢にも思ってもいませんでした。私に研究授業なんてできるのだろうか、とても不安な気持ちになったことが今でもはつき

り思い出されます。しかし、周りの先生方のサポートのおかげで、自分自身がとても成長できたと感じています。今年度のさらなる成長を目指して、昨年度の授業実践を振り返ってみたいと思います。初任者の時には、他クラスと合同で運動をしたり、他の先生の流れを教えてもらったり、他力本願な体育科の授業でした。振り返ってみると、クラスの子どもたちの実態に合っていない授業だったと反省しています。このままではいけないと思い、今まで以上に教材研究に取り組みました。取り扱った教材は「フラグフットボール」です。単元を通して、運動の苦手な児童への支援には悩まされましたが、フラグフットボールの特徴やルールを生かして手立てを考えることで、交流学級の児童も含め、クラス全員が得点の喜びを感じることができました。フラグフットボールの最大の魅力は、作戦次第で全員が得点することができるといことだと考えます。得点できると自信になり、以前より積極的に動くことができるようになります。また、ボールの操作が簡単であるということは運動が苦手な児童にとって大きな魅力で

す。複雑な動作はなく、走る・投げる・捕るのみで競技に参加できるので、作戦のみに集中して取り組むことができます。さらに、他のスポーツに比べ、安全に参加できます。バレーボールのように呼んでいない球が飛んでくることはないし、バスケットボールのように激しい接触ブレイもないので、安心して参加できます。「どうせ、自分には得点できないし……」というネガティブな思考を払拭するのに、フラグフットボールは最適な教材だと思います。

また、公式のルールとは異なる子どもたちの実態に合わせたルールを用意することで、さらに親しみやすく、前向きに参加できるように工夫しました。子どもたちが少しでも得点できるようにコートにそれぞれ一点から四点ゾーンを設けました。運動が苦手な児童も必ず得点することができ、授業後の感想では「もつと点を取りたい」という声が多く挙がり、学習への意欲を高めることに繋がりました。また、考えた作戦を生かすことができるように、三人一組でゲームを行うことにしました。少人数でゲームを行うことで一人一人の役割がはっきりわかるように

しました。さらに、毎時間の目標を「全員得点」にしました。走るのが苦手なA君は、味方に守ってもらって「ブロック作戦」を、パスキャッチが得意なB君は、人がいないところに走っていきパスをもらって「パス作戦」といったように、クラス全員がそれぞれ自分の得点できそうな作戦を考え、持ち寄りました。初めにいくつかの作戦を提示すると、それらの作戦を元に新たな戦術をどんどん作り出して、休み時間までもフラグフットボールで盛り上がりました。また、チームに分かれて練習する時には、どうすれば得点できそうか話し合いをしたり、実際に体を動かして試したりしました。限られた時間の中で、できるだけ何度も何度も作戦を試す姿が見られました。

授業の回数を重ねるうちに、子どもたちが自分たちから進んで動けるようになっていきました。単に準備の仕方を覚えたということだけではなく、もつと作戦を試したい、もつと試合を楽しみたいという気持ちが表れていました。自然と声を掛け合ったり、笑顔が見られたり、充実した時間を過ごすことができました。得点が入った



時には一緒に喜び、失点するとみんなで振り返り、チームワークも生まれました。特に運動が苦手な児童が得点したときには、チームのみんな喜びを共有できました。

振り返ってみると、教師である私の準備や支援と子どもたちの意欲や柔軟な考えがあつてこそ、授業が活性化し、互いの成長に繋がっているということが改めて分かりました。今年度は、初めての低学年を受け持つことになりました。初めてのことはばかりで、戸惑いもありますが、元気いっぱい二年生とぐんぐん成長できるように研修に努めたいです。

子どものために……



砥部町
広田小教諭
土手内聡太
(平二五卒)

私が教師を目指したきっかけは、中学時代の恩師との出会いである。私たちはやんちゃもよくして、先生方にはかなり迷惑をかけたように思うが、その恩師はどんな時にも、熱く、真剣に私たちに語りかけてくれた。その姿を見て、「子どものことを一番に考え、行動できる人になりたい」と教師の道を目指した。

教壇に立つようになって数年経ち、そのことがいかに難しいかを実感している。様々な考えの人がいる中で、また組織の一員として行動する中で、どうすれば「子どものため」を貫くことができるのか、そもそもどんな指導が本当の意味での「子どものため」なのか、自問自答する日々が続いている。

そんな毎日ではあるが、これまで教員として数々の貴重な経験をさせていただき、それらが「私が目指す教師像」を考える上での基盤となっている。その中でも、特に印象深い三つのことについて振り返ってみたい。

一つ目は、講師一年目のことである。目の前にいる純粋な子ども

たちに対して何もできず、何が何だか分からないまま過ぎていく毎日であった。つらいと思う余裕すらなかったが、失敗だけはたくさんしていたような気がする。そんなある時、当時二年生だった子どもに言われた一言が今でも心に残っている。

「先生、最近笑わなくなったね。」

これではいけない。そんな教員に何か魅力があるか。できないならできないなりに、必死で子どもたちとの時間をつくっていく。そう決意させてくれた言葉だった。その後はとにかくがむしゃらに子どもと向き合った。結果、六年生になったその子たちが、「あの時は楽しかった。」と言ってくれたことは、今でも心の支えである。

二つ目は、小規模校での勤務である。受け持った子どもの人数は、一年目が二人、二年目が三人であり、終業式に通知表を渡しているも、「先生、それより鬼ごっこしよう。」と言ってくる元気な子たちであった。この学校では、日々の授業、総合的な学習の時間での海の活動、様々な体験活動、集会での発表など、自分のしたいことを存分にさせてもらった。若気の至りで突っ走った部分もあるが、うまくいったこと、いかなかったことを含めて、したいことをしたからこそ得られた学びがたくさんあった。教師が主体的だと、子どもたちも自然に生き生きとした表情になる。様々な活動に一生懸命な

子どもたちの姿に、ここには教育の原点のようなものがあるということも感じた二年間であった。

もう一つ忘れられない経験が、

体育主任である。昔からとにかく体育が大の苦手な私にとって、(決して嫌いではないのだが)まさに「まさかの」校務であり、最初の職員会で体育主任だと知った時には、ただ苦笑いをしていたのを覚えていて。毎日の運動場のライン引き、プールの管理、相撲、水泳、陸上、運動会、持久走大会……。毎日が体育を中心に回っているような感覚であった。もちろんうまく仕事ができるわけがない。ただ、このときも周りの先生方にすごく恵まれた。企画会で「土手内を支援して」と校長先生が大号令をかけていたこと、前任の体育主任が手取り足取りいつもそばにいて教えてくれたこと、学年部が常に気遣ってくれたことなどにより、何とか一年を終えることができた。その中で、学校運営に少しでも関わった心地よさを感じたり、周りに協力をお願いする大変さや、協力してくれることのありがたさを感じたりした。大きな役目を経験させていただいたことや、周りの方の支えには、本当に感謝をするしかない。

このような経験から、今後の教員生活では次の三つのことを実践したい。①子どもには、いかなるときも真剣に向き合うこと②自分のしたいことができるような環境づくりをしていくこと③学校全体を考えた視点を持ち、行動すること、また協力してくださる周りの方に、感謝の気持ちをもち、ことである。

そんな私であるが、子どもを指導するにあたって唯一自信をもっているのは、「できない人の気持ちに分かる」ことだと思う。先日、跳び箱の指導をしていた際、跳べない子たちを集めて、「分かる、分かる。こういうことがうまくいかんのやろ。」というような話をした。すると、嫌そうな顔をしながら練習していた子が大きくうなずきながら、目を輝かせた。「もししたら、この練習をやってみて。」という指導を行うことができた。

教員である以上、子どもを成長させるのが役割である。なぜできないのか、どんなところができないのかを指導者側が理解できることは、子どもを成長させるための大きなヒントになり得る。(もちろん指導者が得意だからこそできる指導というのもなくさんあり、その人たちが学ぶことも大切にしていきたい。)

最近研修で、県外の放課後デイサービスに勤務している方の話を聞く機会があった。その中で繰り返し出てきたフレーズが、「できることしかできません。」というものであった。成長を諦めているようにも聞こえる言葉であるが、そうではない。子どもでも指導者でも、できないことを最初から求めて無謀なアプローチをしても意味がない。「なんでできないの。」

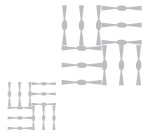
ということに陥ってしまう。できることと、できないことをしっかり見極めた上で、できることを伸ばしたり、できないことをカバーしたりしながら、少しずつ得意なことを増やすためのアプローチが必要であると感じた。

今年度は、再び小規模校で勤務することになった。複式学級は初めての経験であり、また新たなチャレンジである。周りの先生方にも恵まれ、一人一人と真剣に向き合ったり、それぞれの児童の長所を生かした指導ができたりしやすい環境が整っている。その環境を存分に生かした指導を行ってきたい。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で遅れた子どもたちとの学習が、ようやくスタートした。今までと同じではない、新たな教育活動のあり方も求められていくだろう。しかし、どんなときにも子どもと真剣に向き合い、子どもたちにとっての「今」を大切にしながら、今後の教育活動を進めていきたい。



大切なこと



鬼北町

日吉中教諭

水野 公貴

(平二七卒)

私が本気で教員になりたいと思ったのは中学校のときだ。そのときの先生方がとても良い先生ばかりで、特に三年間担任をしていただいた先生は何事にも常に全力で、私たち生徒のためにいつも動いてくださる熱い先生だった。そんな先生の姿を見て、尊敬の念を抱くとともに、私も中学校教員になりたいと思った。

そして、今年で教員六年目を迎える。四年間は岡山県で教員をさせていただき、縁あって昨年、故郷である愛媛に帰ってきた。愛媛に帰ってきて一年目。今まで岡山でやってきているから何とかなるだろうと思って働き始めたが、まるで初めて働いたかのように全てのことが新鮮で、驚き、戸惑ったのを覚えている。

違った。今までは全校生徒七百人規模の学校で働いていたが、日吉中学校は全校生徒二十二人の学校だった。朝の会、授業、給食、委員会、学校行事など全てのことが私のイメージとは違い、本当に同じ学校なのかと驚いた。他にも愛媛県の教育の仕組み、考え方、地域の特色など、今までとは違うことばかりで、とても大変だった。

しかし、県を越えても変わらない考え方もあった。それは、教員が「生徒のことを一番に考えて動く」ということだ。岡山県でも、愛媛県でも、大きい学校でも、小さい学校でも、「どうすればもっと生徒たちに分かりやすく授業ができるだろう」「生徒が安全安心に、充実した学校生活ができるように、行事の計画をしよう」「子どもたちが楽しく遊べるために空いている時間を使って遊具のペンキ塗りをしよう」「生徒たちと一緒に掃除をしよう」など、生徒のために惜しむことなく力を使う教員の姿を見て、環境や、仕組みは違っても、生徒のためにという教育の根本の考え方は一緒なのだと思った。自分が中学生だった頃の

先生たちの姿とも重なり、改めて自分も、生徒にとっては一度しかない中学校生活をより充実したものにするために、生徒たちの成長のよりよいサポートができるように一生懸命頑張らなくては！と強く思った。

私は人に恵まれていると思う。私は、お世辞にも指導力や授業力があつて第一線で活躍する人間ではないが、今、こうして生徒の前に立つて曲がりなりにも働くことができているのは、周りの人のおかげだ。行き詰ったり、困ったりしたときに、次は自分でできるように優しく助けてくださる先生方。とても協力的で、いつも応援してくださる保護者や地域の方々。素直で、何にでも頑張り、いつも私に元気を与えてくれる生徒たち。私は本当に恵まれている。「人は一人では生きてはいけないんだ」とか、「困ったときにはみんな協力して解決しよう」とか、普段、生徒に対してよく使うような言葉だが、まさにその本質となる大切さを自分が体験していて、本当に大切な、生徒に伝えるべきことは日常の中にあるものなのだ



と実感している。今の恵まれた環境に感謝し、少しずつでも一人前の教員になっていきたい。そして、「困った人がいたら助ける」「思いやりの気持ちをもつ」「感謝の気持ちを忘れない」といったような当たり前ではあるが、人と人同士が生きていく上で本当に大切なことをいつまでも忘れず、上っ面だけでなく本気で生徒たちに伝えていかなければいけないと思う。そして、先輩たちのように、二十年、三十年後には今度は私が後輩の教員に対して助けてあげられるような存在になっていきたい。

表紙作品について

「みのりの秋」



作者

川端 信吾

(昭五四卒)

壁画というと「壁」という場所を描かれた作品をイメージされると思いますが、私の専門は古くからあるフレスコ画を含めた壁画技法です。何が違うかというと、前者は既存の建物があればすぐに様々な描材で描くことができますが、後者は左官職と同じく壁塗りをする必要があります。

技法としては「グラッフィート」というフレスコ画の関連技法を用いています。壁に色漆喰を塗り付け、その上に消石灰クリームを刷毛塗りし、ニードル等の先の尖った道具で引掻いて描きました。漆喰が硬化してしまわないうちに制作しないとイケないので、大きな画面を一口气に仕上げることはできません。パッチワークのように部分をつなぎ合わせて制作しています。画面をよく見るとそのつなぎ目がわかります。

作品は人が多く行き交う場所に建っているビルの外壁にあります。完成してから半年ほどたちました。これから年月を経ることによって少しずつ風景に馴染み、その魅力が深まることを願っています。

(松山市在住)

三十二才の今、思うこと



愛媛大学教育学部
附属中教諭
薬師神吉啓

(平二三卒)

学級活動では、キャリア教育の一環として、子どもたちが将来について考える時間がある。(この

関係の話を子どもたちにする度に、「思うは招く」の植松努さんの話を思い出す。気になる方は調べてみてほしい。)「将来の夢」について聞くと、ほとんどの生徒は「将来の仕事」について考える。別に不思議なことではないし、私もそうだった。「小学校の先生になりたい。」「サッカーにかかわる仕事に就きたい。」「将来のことなんて考えたことがない。」「ユーチューブとブログで生活していきたい。」「色々な子どもたちがいるなかで、自分はどうだっただろうか?と考える。

二十年近く前、進路希望調査で

「将来の夢」を聞かれ、何でもいから必ず書くように言われ、絞り出すように書いたような覚えがある。のほほんと生きてきて、将来について真剣に考えたことがなかった。漠然とサラリーマンには向かない気がしていたし、最初に思いついたのは、実家の八百屋であつた。それ以外の仕事は、先生か警察か消防士くらいしか思い浮かばなかった。

「将来の夢」と聞かれて、「学校の先生」と答えるようになったのがいつごろからだったのか覚えていないが、中学校の先生たちが毎日楽しそうで、生き生きとしていて、その姿に憧れて先生を目指すようになった。

実際に先生になってみて、とてもやりがいを感じるし、子どもたちと過ごす時間は楽しい。しかし、先生という職業は、楽しいことばかりではない。以前一緒に勤めていた先生たちの中には、毎朝6時には学校にいて仕事をしている先生もいたし、土日は部活動で一日練習が当たり前という先生も

いた。でも、不思議とそんな先生たちほど、日々生き生きと活動していた。好きなことに熱中してエネルギーを注いでいるとき、エネルギーは使えば使うほど沸いてくるものではないかと思うことがある。きっとそれなのだろう。

「働き方改革」という言葉を耳にするようになって久しい。「日本人は働き過ぎ」「仕事の時間効率が悪い」ということらしい。「働き方改革」を進めることは大切だ。効率化できる所は効率化すべきだし、不要な物は減らしていけば良いと思う。「karoshi」なんて言葉が使われることのない世界になってほしい。実際、勤務時間について考えるようになってから、やるべきことを効率よく進めようとか、隙間時間を上手く使おうという気持ちで以前より湧いてくるようになったと思う。

それと同時に、最近思うことがある。「働き方改革」は、これまでの「自分の働き方」「自分の生き方」について改めて考える機会だ、と。振り返ると教員生活も十

年近くなり、年齢も三十を超えた。まだまだ先輩方に迷惑をかけることが多く、うまくいかないことばかりだ。「先生として生きる」とことと「先生をする」とことは、同じようで違うと私は思う。「将来、何になりたいか?」ということは、「将来、どのような仕事に就きたいか?」とほぼ同義で使われることが多い。でも、大事なことは「何になりたいか」ではなく「どのようになりたいか」ではないだろうか。今の私は、生きたいように生きているのだろうか?十五年前の自分が憧れた先生たちに近づけているのだろうか?五年、十年経ったとき、自分は「こんなことをしてきた。」と胸を張って言える人生を生きているだろうか?

正直、今は分からない。そうでありたいと思う反面、もつとできることがあるんじゃないか?という焦りも迷いもある。でも、この迷いや焦りがあるお陰で、今日も新しいことにチャレンジしたいと思うし、専門としている教科に限らず学びたいと思う。

孔子曰く「三十にして立つ」らしい。孔子ほどの人物でも三十歳でようやく自立できたということらしい。先日、三十二になったが、相変わらず自分だけでできることはほとんどない。孔子曰く「四十にして惑わず」らしい。でも、私は四十までといわず、一生惑いながら変わりながら、生きていきたいと思う。そんな人間がいてもいいのが先生だと思う。予測困難な社会を生きていくこれからの子どもたちに、「先生としての私」は何をしてあげられるだろうか。今日も焦りながら、迷いながら子どもたちと一緒に考えて進んでいきたいと思う。



国際理解教育コースの思い出

日常の日々にも国際理解！

国際理解教育コース

赤塚 鮎美

(旧姓 藤本)
(平一七卒)

卒業してすでに十三年経ちましたが、国際理解教育コースとの出会いとは、自分のいるこの世界の見え方を変えるための新しい人生の始まりであつたと思います。素晴らしい仲間と出会い、それまで知らなかった世界の面白さを先生方に教えていただき、今の自分の生き方にもつながる「本当の国際理解とは何なのか」という問いに向き合うきっかけをいただいた場所でした。

という響きは、外国っぽくつかっこいい！という浅はかな考えしかありませんでした。そんな私が変われたのは、国際理解教育コースに出会えたからです。

入学してまず初めに感じたことは、自分の好きなことや将来の目標について、同じ熱量で語り合える仲間ができたという喜びでした。その仲間の存在が励みや刺激になり、時には自分を鼓舞させるためのエネルギーにもなっていました。夢や目標も似ていて、毎日顔を合やす近い存在だからこそ、時には同志、時にはよきライバルとして、共に励まし合い、共に切磋琢磨し、素晴らしい相乗効果が生まれていたと思います。

また、情熱的かつ知的で、さらにはユーモアにもあふれた先生方の存在なくして、国際理解教育コースを語ることはできません。

大学で英語力を磨きたいと思っていた私にとって、英語のプロである英語科の先生方に出会えたことや、実践的な英語に触れたことは、この上ないほど幸せなことでした。一方、国語科の先生方との出会いは、衝撃的でした。高校生までの私は、興味津々だった外国文化や英語に比べて、日本文化への興味は薄く、国語は嫌いな科目でした。そんな私にとって、国語科の先生方がとても楽しそうに、「ここが面白いポイントですよ！」というのを分かりやすく説明してくださっていたことが、とてつもなく衝撃的でした。自分には興味がないことや嫌いなことを、あまりにも楽しそうに先生方がお話をされるので、「もしかして、国語が嫌いなのも、日本文化はつまらないと思っているのも、実は単なる思い込み?! 先生方が楽しそうに語られる世界を、私もちょっと覗いてみようかな。」と思うようになったのです。まさに、青天の霹靂、「国語の食わず嫌い」状態だった自分に気付いたのです。そして、日本文化への興味が薄かった私が、日本文化に関する卒業論文を書いたと思うと、信じ

られない変化です。自分の意識を変えるだけで、見える世界が変わると実感した出来事でした。

そして、研究した内容で、一番心に残っていたことは、卒業論文を通して、指導教官の福田先生からいただいた「本当の国際理解とは何なのか」という大きな問いです。卒業論文を書く際には、それまで以上に「国際理解」の意味について真剣に考えたわけなのですが、その問いは私の心にずっと残ったままでした。この文集をきっかけに、改めて、その問いについて考えてみることにしました。

「国際理解」の概念といえば、「自国の文化・他国の文化、その両方に関心を向け、理解し尊重し合うこと」、「国同士が協力し国際問題の解決に取り組むこと」といった国レベルでの解釈が多いと思います。しかし、今回、国や人種といった枠組みを外して考えてみました。そうした理由は、三年ほどアメリカに住んでみて、「アメリカ(人)だから」、「日本(人)だから」という観点で物事を区別することが多くなっていた時、国や人種の意識も大事だけれども、その意識

原稿募集

— 次号 第三百三十一号 —

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

◇ 「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと

2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など

3 教育雑感 6 地域の名所紹介

(写真)

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会では選ばせていただきますので、ご了承ください。

◇ 原稿〆切 十一月三十日

★ 発行 二月一日 予定

★ 字数

★ 依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いてください。

★ 写真

★ 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

だけがあまりにも強くなり過ぎると、自分の中に差別や偏見を生みだし、真実が見えなくなると感じただからです。そうして考えた「本当の国際理解」とは、「他者との関わりや初めての経験という異文化を通して、ネガティブな感情を抱いたり、問題に直面したりしても、冷静になってとるべき行動について考え、その答えを求め続け、実践していくことであり、そのためには、自分を知り、相手を知り、物事の本質を見極めることが大切である」、ということでした。つまり、「国際理解」とは「人間理解」なのだと思います。

「異文化」の概念も、違いが分かりやすい国単位で比較されることが多いですが、国単位ではなく、共通点の多い人間同士を比べても、あらゆる点で全てが同じという人間は存在せず、何かしらの違いがあることは明らかです。人間が二人以上存在する場所には、必ず異文化が存在しています。「異文化なんてない！」と思っていた半径2kmの生活にも、異文化が存在していたことに気付くことができます。つまり、「異文化」とは、国籍など関係なく自分以外の

他者全員であり、また、自分なりのもの全てであると解釈したいのです。一言で異文化といっても、魅力的でわくわくするような異文化、特に何も感じないという異文化、妬みや嫌悪感や衝突といったネガティブな事柄につながる異文化など様々です。重要なことは、ネガティブな異文化に出会ったとき、自分がどう向き合うかだと思います。そこで未来が変わってきます。たとえば、互いに魅力を感じ、好きで一緒になったカップルでも、価値観の違いやそれまで知らなかった相手の一面を知ることによって、相手に嫌悪感を抱くことはあります。大きな問題に発展することさえあります。異文化を持つ人間同士であると理解できれば、それも当たり前のことだと現実を受け入れられます。それは、憧れを抱いて自分から飛び出した海外で、カルチャーショックを受けたり、ネガティブな真実を知ったりすることによって、海外に来たことを後悔したり、うまくやっていけるか不安になってしまったりすることにも似ています。カップルの例でも、カルチャーショックの例でも、ネガティブな異文化

に直面した時、「国際理解」の視点で問題を乗り越えていく努力をするのか、それとも、感情的になって問題を深刻化させていくのか、どちらがよいかは明白です。ただ、複雑な人間関係においては、「永遠に理解し合えない」と思ってしまったたり、いがみ合って「断絶したような関係」になってしまったりすることもあると思います。そんな時でも、同じ人間同士であるという謙虚な気持ちは忘れてはいけないのだと思います。

また、自分にはないもの全てが異文化であると考えたと、知らなかったことを初めて知ったり、経験したことのないことを初めて経験したりすることの全てが、異文化を知ることだと言えます。行ったことのない美容院に初めて行くことや、山登りに初めて挑戦することといったことも異文化を知ることであり、私にとっては、人生で初めて先生が楽しそうに語る国語の授業を受けたことも、異文化を知ることなのでした。ここでも、ネガティブな異文化を経験した時に、自分がどう向き合うかが重要になります。そして、ネガティブな異文化を努力で乗り越えていく

という点では、海外で経験するカルチャーショックを乗り越えていくことも、初めての子育てで戸惑っていた自分が肝っ玉母ちゃんに進化していくことも、新入社員で右も左も分からなかった自分が部下を育てる立場になるほど成長すること、同じ「国際理解」なのだと思います。さらに、他者との関わりや様々な経験を通して、自分がとった行動や抱いた感情に、自分で驚くことがあります。これもまた、「今まで気付かなかった自分の一面を初めて知る」という意味で、異文化を知ることなのだと思います。

このような視点で「異文化」や「国際理解」について考えた時、「文化」も「異文化」も「生きる」とそのものであり、「国際理解」＝「人間理解」という解釈に広がつていき、人は人生で様々な「異文化」を通して「国際理解」を経験することで、人間味が増して、人として成長していけるのではないかと思います。おのずと、異文化を受け入れる心や、他者を思いやる気持ちも育まれていくのではないのでしょうか。だからこそ、「異文化」や「国際理解」という概念

が、海外に関心のある人や、海外との関わりがある人といった「限られた一部の人のためのもの」としてではなく、「国際理解」＝「人間理解」という視点で、全ての人が自分の人生に落とし込んで考えられる普遍的な概念として認識されるようになってほしいと思うのです。自分の人生だけでなく、世界の見え方が変わってくるはずだと思ふのです。教育の場でその役割を果たせる国際理解教育コースがなくなってしまうことは、本当に残念です。国際理解教育コースだからこそできることが、まだまだあったはずなんです。それでも、私ひとり、個人レベルではありますが、これからも日常にあふれる「異文化」との出会いを大事にして、日常生活の中の「国際理解」を実践し、まずは私の半径2kmの世界から少しずついい方向に変えていけたらと思います。それがいつか、この大きな世界を変えられる何かに、つながっていけばいいなと思います。



国際理解教育コースの思い出

国際の先生から学んだ
国語や古典が好き

国際理解教育コース

真木のどか

(旧姓 山内)
(平一九卒)

私は現在、地元の西条市で結婚して三人の子どもに恵まれ、仕事は書道教室の先生をしています。

書道教室を経営して約十年、近所の保育園や幼稚園、小中高の学生、大人と、幅広い年齢層の生徒がたくさん通って来てくれていま

す。入学当初は、国語の教師になりたいという希望を胸に国際理解教育コースで勉強していました。

国語と書道の免許を取得できるように、国際理解教育コースの授業を受けながら、国語と書道の授業を主に受けていたので、佐藤先生、渥美先生、加藤先生、東先生、福田先生の授業に出席する機会が多くなりました。

佐藤先生の授業は、日本語の言

葉について（ら抜き言葉や地方の

方言、尊敬語や謙譲語）の授業が

とてもおもしろくて、正岡子規や松尾芭蕉などの俳句の授業も印象に残っています。佐藤先生の授業を受けて、日本語って美しいなと改めて感じました。

渥美先生の授業では、自分が選んだ文庫本から作者の意図や作品

構図、文章表現で発見した事などを発表形式で謎解きのように説明していくことが楽しくて、他の生徒の発表を聞くのも自分で調べた事を人に聞いてもらうのも良い経験になりました。今でも授業で紹介された本は折を見てこつこつ読んでいます。

加藤先生には中国のことについ

て教わり、三国志の授業が印象に残っています。

中国と韓国に国際理解教育コースのみんなが研修に行けたことも良い思い出です。

国際理解教育コースで東先生の書道の授業を受けていたのは私だけだったので、国語科の学生達に交じって新鮮な刺激をもらいながら古典書道の勉強をしたり書を書いたりしていました。今の仕事に直接関係して役に立っているの

感謝しています。

卒業論文は担任の福田先生にご指導いただき、古典の童話（主に浦島太郎）について研究しました。

幼児文学の童話が好きで、昔の童話を研究したい一心で大阪の万博記念公園内にある国際児童文学館に赴いたりもしました。論文発表の際に、ある先生から聞かれて痛い質問をされ、それに対して支離滅裂になりながらもとにかく回答をしたところ、福田先生からは合っているかどうかよりも何でも

いいから自分の意見を反論したと

いう事実がよかったと笑って言う

ていただき、その言葉に救われた

当時のことが今でも忘れられませ

ん。

そして、やっぱり私は浅い知識で間違った回答を必死でなんとか

言っていたのだなと気づき、良き

笑い話となりました。

福田先生の授業では陰陽師や妖怪など、古典の怪しい世界にぐい

ぐいとひきこまれる授業がマニアックでとても好きでした。現在は古典仮名を専門とする書道会に所属しているので、福田先生の授業で受けた諸々の昔の人物が歌った歌や書も、古典仮名を書いてい

るときにたくさん登場してきます。古典書を読み解くことが仕事兼趣味となり、福田先生の授業を受けて古典が楽しい、好きだという気持ちが今も私の根底にあり、それが今の自分を作っていると感じています。英語があまり得意ではなかった私ですが、頼まれて西条市に来る留学生に書道を教える機会も時々あるので、国際理解教

育の授業や英語の授業も今の私には貴重な経験となっています。卒業時には国語と書道の免許を取得し、数年は外で勤めるなかで書道会において師範となり、今の仕事の基盤を徐々に作っていきま

した。

あと残り三単位くらい足りなく

て英語の免許を取得できなかった

ことが心残りではありますが、単位修得計算ミスの爪の甘いところも含めて大学時代の思い出です。

在学中は、とにかく授業と部活動に専念し、あつという間の四年間でした。同じ剣道部で国際理解教育コースの後輩大石さんの活躍や同回生や先輩のご活躍も励みになって

います。

また、国際理解教育コースの諸先生方の益々のご活躍も陰ながら

拝見して、自分も成長していけたらと思っています。国際理解教育

コースの諸先生方、皆様、本当にありがとうございます。コースは無くなりますが今後も宜しくお

願い申し上げます。

愛媛大学からのお知らせ

愛媛大学長 大 橋 裕 一

『愛媛大学基金－コロナ緊急支援奨学金－』への御支援について（お願い）

拝啓 薫風の候、貴会におかれましては益々御隆盛のことと存じます。

常日頃から、本学の教育・研究に対し、深い御理解と御支援を賜り厚く御礼申し上げます。

今般、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大に伴う社会情勢の変化により、家計支持者の失業・減収や、学生のアルバイトによる収入減など、愛媛県を含め全国各地で、経済的に困窮し、修学の継続が困難になっている学生が増えております。

このような状況を受け、本学では、皆様から心のこもった御芳志『愛媛大学基金（えみか夢基金）』を原資とさせていただき、愛媛大学独自の学生支援策として、生活に困っている学生に対し『愛媛大学緊急支援給付金（※）』事業に取り組むこととしました。

本学において、経済的に困窮している学生に対し十分な対策を講じ、継続的な支援を行っていく所存です。コロナの第2波、第3波の襲来を想定した支援（同額の給付型奨学金（※）の創設等）を検討中ですが、確実に実施するためには、安定した『財政基盤』や『基金の拡充』が不可欠です。

その取組みの一つとして、学内教職員は基より、一般篤志家の皆様及び企業の皆様等へ御支援をお願いさせて頂いているところです。

つきましては、教育学部同窓会員におかれましても、生活に困っている学生に対し、愛媛大学の気持ちのこもった対策として、引き続き支援することができますよう、愛媛大学基金（『未来教育基金』または『えみか夢基金』）へ御支援を賜りたく、御協力いただきますよう、宜しくお願い致します。

敬具

（※）参 考

愛媛大学独自のコロナ対策（Ⅰ） **愛媛大学緊急支援給付金（令和2年度緊急支援①）**

⇒ 3万円／人を基準として1千人程度支援

財源：えみか夢基金（所得控除対象／企業；全額損金計上可能）

愛媛大学独自のコロナ対策（Ⅱ） **愛媛大学コロナ対応緊急支援奨学金（令和2年度緊急支援②）**

⇒ 3万円／人を基準として支援

財源：未来教育基金（税額控除対象）、えみか夢基金（同上）

〈お問い合わせ先〉



愛媛大学基金室

TEL : 089-927-8346、8110

FAX : 089-927-9025

MAIL : kikin@stu.ehime-u.ac.

◆サテライトオフィス東京の閉鎖

総務部総務課より下記の連絡がありました。

現在本学が東京都港区田町に設置しております「サテライトオフィス東京」について、昨今の新型コロナウイルス感染拡大を受け、現在利用受付を停止しているところですが、現地に常駐職員がいない中で、今後、安全にご利用いただくための感染防止対策が困難な状況であることから、この度、契約満了を待たずに閉鎖することといたしました。閉鎖の時期は、年内を予定しております。

先輩を偲ぶ

あしあと (3)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より抜粋)

愛媛大学教育学部は、愛媛師範学校・愛媛県女子師範学校・愛媛青年師範学校を前身とし昭和二十四年に発足しました。合わせて、三万二千人あまりの学生が巣立ちました。そうした先輩たちが過ごした時代背景を知り、多くの先輩たちが何を思い、何を感じその時代の大学生活を過ごしてきたかを知ることは意義のあることと考え、シリーズとして昭和五十一年に発行された「教育学部同窓会百周年記念誌」より抜粋し、二〇〇周年記念に向かっていきたいと思います。

(愛媛大学教育学部同窓会事務局)



「思い出のまご」

愛媛県師範学校

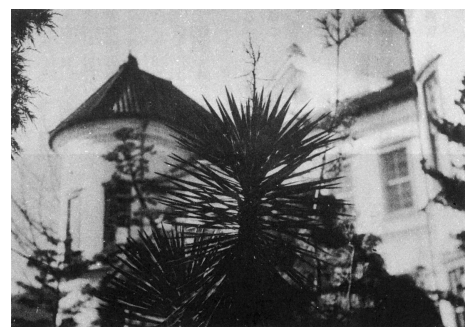
田村 タメ氏寄稿

(明治四〇年卒)

私は明治四〇年三月に愛媛師範第一部本科を卒業いたしました。このたび、愛大教育学部百周年祭行事で百周年誌編集について、ぜひ投稿せよとのこと、いたらないことですが思い出のままと述べてさせていただきます。

私には、同じ愛媛県師範学校を卒業して今治河北高等学校に就いて一人の兄がいました。兄は小さいころから私の向学心を賞賛してくれ、どこまでも私をのばしてやろうと尽くしてくれていました。私の卒業前に病気になる半年の病で亡くなりました。兄

は病気となっても妹には教えないでほしいといっていたことを聞き、思いやりの心には、いたく感動しました。また、その兄の亡くなった弔報に接した時は、私もいっしょに死にたいくらいに気持ちでした。その後師範から高師へと念願し、舎監の相川先生につき特別の勉学をしていました。このころの同志が、近藤キミエさん、武田米子さん等で、休暇になっても帰郷もせず石手寺にこもり、ただ一途に勉強に励んでいたのですから、兄の死がたまらなく残念でなりません。葬儀をすませ泣きながら帰校すると、相川先生が、「あなたは家の後をみねばならなくなったのだから進学は思いどまらねばならない。」と申されるので、いっそう兄の病死がいたく、悲しみに堪えられませんでした。ついに就職に決し、初めの勤務校は、郷里の村、井口小学校でした。師範出身者は女子では私が多一人、島はじめてのことでしたから、大三島の先祖といわれ、何かと注目の的となり研究会や発表などみんな私にあてられ、また、学校での日々の勤めのうち、とくに新式体操を重んぜられ、女子ながら私に受け持たされました。ダンスといえは昔は表情遊戯ばかり



白亜の殿堂 (明治23. 9 建築)

でしたが、近代ダンスの初歩(当時は最新のもの)といったことを私がはじめて導入したのです。そしてまた、遊動木の施設はあれどその使用を知った方がいないため放置状態でしたが、校長先生からそれを指導せよとのことで私が指導しましたら、田畑で働いておられた農夫の方々が珍しがられて見学に集まるといったようなこともあり、女性の私が体操の先生といわれもてはやされると共に、井口校は大三島での新式体操やダンス等の中心校となっていました。

こうして一年間は夢のようにやぐたちましたが、忘れられないのは私の向学心。私は翌年退職願を出し夏休みを利用して上京し、漢文は二松学舎に、国語は国

語伝修所にはいり文部省検定をめぐっていました。ところが、校長が私の両親に私の退職届が出ていることを話されたので、家ではたいへん驚いて、校長先生と村長(義兄)にどうぞ家に帰ってくださいようにと嘆願いたしたそうです。ですから私には毎日のように手紙が来ました。とうとう、「帰らねば連れにいく。」とのこと、再び泣きながらしかたなく家に帰りました。いよいよ腹をすえて学校に勤務することになりました。校長先生や村長さんのことば、「続けること。」「親に反対されるのを押し切って成功したのは成功ではない。」など今も耳に残っています。

こうして一心につとめました。女子教員大会で、郷里の小学校で特別児童の教育について研究発表をし、地についた具体的な実証研究だと近藤視学さんにほめてもらいました。

そのうちに私の子供たちがだんだんと大きくなり、その教育にと広島に出ていくこととなりました。当時四五才でした。「続けること。」と教えてくれた人にすまないと思えど、主人の考えにて、またしかたなし。でも私はそのことから、今は茶華道一すじに生き

ています。今までの残念だったことが原因となってこの道に生きられたのでしょうか。広島県立可部高女・青年学校・盛口中学校・大三島高校など思い出の多い私のつとめた学校です。生涯教育は大切なことでもあります。

「忘れ得ぬ恩師」

愛媛県女子師範学校

松本真須子氏寄稿

(大正九年卒)

全員寮生活のせいか、三津女子師範学校の思い出は深くつかしい。ことに舎監の先生は慈母のように思われました。中でも徳久よね先生は忘れようとしても忘れることはできません。盲目編の筒袖にインク色の袴を長くひるがえす色黒い先生だった。奈良女高師新卒の若さを以て、私たち一年生に熱情を以て教導されました。教室では、国語習字を受け持ち、級主任のうえ舎監もつとめられました。今思えば定めし激務であったと思います。

大きな丸い目を虚空に据え、恍惚として教材に憧れるような口調で透徹した教え方であった。一語一句心に刻みました。大きな手で一人一人毛筆の運びを教えられ、

二十枚の清書を強いられて泡をふいたことも、今はただ感謝です。文字・絵画・詩歌・文字等、まれに見るすぐれた先生でした。薄暗い舎監室で、細かい刺繍をしながら、「この美しさをごらん、上手でしょう。」と満面に笑みを湛えて自慢された天真な童顔が今も見えるようです。告別式にも泣いたし、見送りの時は泣き声で追いかけて、幼児が母を呼ぶように縋って先生を困らせました。今でも我ら九回生は、故徳久先生を讃え、毎年クラス会には遺墨を床に飾り、守り本尊のように御軸に見入るのです。淡く美しい彩色、綿密な筆致、秋の深山に引き込まれるような幽寂な大作です。クラス会員一五名は今さらのように、先生の巾広の御趣味と技量に感嘆して人徳を慕っています。一別以来、ついにお目もじ出来ず、故人となられました。池田のぶさんの御尽力で遺墨を受けたことがせめてもの御縁かとうれしく思います。

忘れ得ぬ恩師はたくさんあります。修学旅行中しんげん袋を忘れて草野先生を困らせたり、たびたび病氣して慈母のような田中先生におせわをかけたり、穴があれば入りたいような思いです。先生方が今も、もの言いかけてくださる

気がします。上品な植村先生の黒板画の美しく巧みであったこと、端正厳格な麻生先生、重厚で蘊蓄のある葛西先生、等々お懐かしい先生の面影が後先なく浮かんで消えていきます。

長い四か年三津の学びやに青春を暮らし、旧師に友にと深い恩情を受けましたことも五〇有余年の昔ですが、別れの時は泣きました。卒業の答辞を聞いて堂内にすすり泣きが起こりました。ともあれ泣き虫でした。当世の高校卒等のあつさりした別れなどとは隔世の感があります。不自由不便貧弱な学舎の中で、外柔・内剛という女性教育の目標、真・善・美・聖の火に向かって努力した昔を尊いものと思います。すなおに献身する教職を天職と教えられ、陛下のおおみ宝、日本の子宝を教育することの尊さを身につけました。汚職・スト・ゲバ・ハイジャック等の言葉は、まったく不要でした。デモクラシーがちよつぱり顔を出していたころかと思えます。

愛媛女子教師百年の歩みに続く、尽きることのないであらう女教師の不滅の火は、ますます栄え輝くことでありましょう。

「回顧」

愛媛大学教育学部

渡部 一也氏寄稿

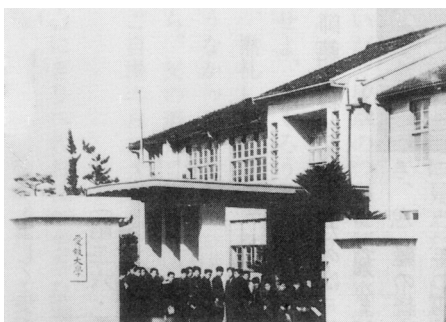
(昭和二十六年卒)

愛媛大学第一回生として、晴れの入学をしたのは、終戦の後遺症も生々しい昭和二十四年。大学とはいえ、校舎は一部をのぞき、時の松山博会場をそのままゆずりうけた木造のバラック同様、冬の風の強い日など、オーバーの襟を立て、身をちぢめ、ガタガタふるえながらの授業、しかもスシ詰め。一人があちこち移動して声音をかえての返事、出欠をとる先生も大へんだったでしょう。当時の学生たちのチームワークのよさは、その他の領域でも抜群。「助け合い教育」はすでに1/4世紀も前から……。

グラウンドも大部分が、スッポリと身を包んでくれるほどの一面の草原(アベックの絶好の憩いの場所であったのでしょうか。純心なわれわれの好奇心をそそる遺失物があちこちに。また、放課後の部活動の英気を養うための優秀な学生のためには格好のかくれみのとなつてはくれた)この草原の間にあったグラウンドでは、ささやかながらも活気に満ちた部の練習が見られた。現在の種目協会や現場の監督・コーチの大部分は、この原野で活躍した人が多いのではないだろうか。

このようなめぐまれない環境の中、その他の分野でも意気さかな闘士も多数いた。とくに警察のごやつかいにまでなった「杜研部」数少ない女子学生をめぐつての争奪戦等々……。

とにかく現愛媛大学とは、施設、設備は申すに及ばず、あらゆる面で見当のちがう当時、そこで青春のエネルギーを燃やし、混乱期をきりぬけたわれら一期生もやがて四〇代から五十代へ。苦い汁も、甘い汁も十分味わいつくしたその経験とキャリアにものをいわし、さらに大きく、たくましく歩み続けたものである。



卒業式のあとで(昭和26.3)

会員の声

能の世界



愛媛大学元教職員

河野真知子

【はじめに】

皆様初めまして。まずは、自己紹介。四十年間在籍した附属特別支援学校を退職して、その後二年間も含めると四十二年もの長期にわたり愛媛大学でお世話になりました。今回の依頼を受けて、まだまだ初心者ですが、これも何かのご縁と、能の稽古についての歩みをまとめてみました。能の面白さが少しでも伝わりましたら幸いです。



【出会いは飲み会から】

今をさかのぼること八年前、季節は秋。附属学校園での通称おでんの会でのことです。おでんの会とは、毎年附属学校園の教職員が一堂に会し、前半は教育会の研修会、後半は懇親会が催されます。その席でたまたま隣に座られた附属の大先輩の方からのお声かけがきっかけでした。

実はその前年に大山祇神社の薪能を物珍しさで見に行ったくらいで能とは何？謡曲とは？仕舞とは？と????の疑問符ばかりの始

まりでした。

【師匠は能楽師】

何も知らない私が紹介されたのは、お若い藤井丈雄先生でした。なんと神戸から月二回金曜日夕方に仕舞と謡曲を個人レッスン。そして翌土曜日の午後NHK文化センターで「始めてみよう能楽」という謡曲教室に来松して下さいます。藤井先生は観世流シテ方の能楽師で、とても深淵としてお若く、先生の朗々たる謡曲を聞くと胸が熱くなります。また、先生がお手本の仕舞を舞われるとその舞台が、周囲が、凜といったします。



藤井丈雄師の舞姿

【そもそも能とは？】

と、大上段に振りかざしますと、

なかなか筆が進みません。ここでは師匠に教えていただいた「室町時代に大成された、日本独自の例えるならミュージカルのような歌舞劇です。パントマイムの要素もあるので、難しく考えずに長く伝わってきた型を物真似感覚で稽古していきましょう」と言われたことを胸に、現在に至っています。また、こうも言われました。「能楽は日本で最初に選ばれた世界無形文化遺産である」と。確かに歌舞伎よりも早く二〇〇一年に選ばれたそうです。

しかし、一般的には高尚で難解な芸術と言われています。台詞や謡が古語で、何を言っているかわからない、聞いていると眠くなるという方が多いのも事実です。さらに、現在は別のジャンルとされている能と狂言ですが、実は兄弟のような関係で、二つを合わせて能楽と呼ぶ向きもあるようです。能の中で狂言方が演じる間

きょうげん
狂言というものもあります。

歴史的に見れば、歌舞伎や人形浄瑠璃・文楽は能楽よりも後に確立され、能から素材やモチーフを得ているものも少なくありません。

【能の世界の奥深さ】

能舞台で演じられる場合は、能装束に身を包んだシテやワキやワキツレなどの登場人物が、セリフや舞を演じ、そばには地謡という合唱団がひかえ、物語が進行します。

金襴などで織られた能装束は受け継がれた高価なものなら車一台分は優に超えますし、主要な演者のつける能面にもいろいろあつて、(能面は、おもてと言います。)役柄によって決まっています。こちらも値段など付けられない国宝級のものもあるそうです。この面をつけて演じることとはとても難しく、発声の仕方とも西洋音楽とは違

います。また、謡い方も重要で、
剛吟と柔吟の二種類があり、同
じ記号でも謡い分けないといけま
せん。

さらに舞台での舞や所作は、よ
く知られているようにすり足での
運びや構えが基本です。お稽古で
も動きに緩急をつけることや基本
の所作がなかなか身につきませ
ん。ですから、面の角度により心
の動きを伝えることなど到底でき
そうにありません。

今迄に習った仕舞は七曲で一
曲に一年以上かかる場合もあり、
遅々たる歩みです。謡曲は三十余
り習いましたが、それでもまだ全
曲の一、二割に過ぎないほどで
す。こんなに奥が深い能の世界の
入り口に立った私ですが、一つ一
つの動作の意味するものを演じら
れるように精進あるのみ、です。

【能の演目】

話は変わりますが、曲すなわち

演目の題材は多岐にわたります。
平家物語や源氏物語、伊勢物語な
どからとられたものも多く、また、
中国が舞台の曲もあります。

能は、皆様ご存じのように観阿
弥と世阿弥の親子が、室町三代将
軍足利義満の庇護を受けて、大成
発展しました。それ以後、戦国時
代に次第に普及し江戸時代では徳
川幕府より式楽として用いられる
ようになりました。庶民にも江
戸、明治時代には、曲のみを謡う
謡曲や一部の舞を舞う仕舞が習い
事として浸透してきたようです。

松山でも能楽は盛んで、松平家
の集めた能装束などが東雲神社に
保存され、毎年春に「東雲能」と
して能も奉納されます。また狂言
師の方も現在おられ、自宅に能舞
台を備えていらつしやいます。現
在はそちらで仕舞の練習をさせて
いただいております。

また、かの三島由紀夫には能の
演目を題材に小説や戯曲に書き直

した作品「近代能楽集」がありま
す。

このように、人間のさまざまな
側面を、生き方を取り上げている
能を習いながら、現代人の生き方
よりも、もっと心情が豊かだった
ことを実感し、古人の生き様を追
体験しています。

よく言われる夢幻能には、旅の
僧の夢の中に、神仙、鬼人、精、
天人などの神秘的存在が登場しま
す。僧の力は偉大で、怨霊や亡霊
が、仏力や法力で回向したり調伏
したりする場面が出てきます。神
秘の力を借りて様々なたけり狂う
心情を収めようとしたのでしょ
う。法華経などの実際のお経も出
て参ります。現代のような信仰心
からはとても考えられません。

【能は脳トレ！】

初心者の教科書は「観世流初心
謡本」という十五曲を三冊に分け
た和綴じの本です。また、仕舞は

「観世流仕舞入門形附」という本

に十曲載っています。私はその教
科書のきれいな毛筆体が好きで眺
めていると飽きません。実際の稽
古の上達は遅々たるもので、覚え
てもすぐ忘れる、の繰り返しです
が、そのことも脳トレと割り切っ
て、楽しむことにしています。能
のトレーニングは脳トレ！つま
り、能トレは脳トレ！です。（笑）
また仕舞はもちろんのことです
が、謡も腹式呼吸を主として体幹
を安定させなければなりません。
ですから体幹の訓練にもなりま
す。それに腹から声を出すとスト
レス解消にもなります。

こんな風書いてきますと、能
の神髄は何もわかっていない、と
言われそうですが、学生時代に過
ごした京都や大阪、神戸などの
知っている地名が出てくることも
喜びです。そういうところを訪ね
て歩く謡蹟めぐりが私の夢でもあ
ります。

とりとめのない話にお付き合い
くださいまして本当にありがとうございます。
少しだけでも能の世
界に興味を持たれましたら、ぜひ
一緒に習いませんか？新しい発見
があつて、日々が楽しくなること
受け合いです。日本の歴史や古来
からの心情の豊かさを体験体感
たしましょう。そして新型ウイル
スにも負けない抵抗力、免疫力を
つけましょう

羽衣の季節は過ぎし夏に舞ふ

眞知子



能 羽 衣

菩薩道的教育哲学の構築へ

—「教行信証」に学ぶ—

吉原 宏文
(昭四二卒)

愛媛大学教育学部同窓会報

(一二七号)と(一二八号)との敬弔欄によって、私は近藤重明先生(西洋哲学)と金谷茂先生(教育学)の両先生が亡くなられたことを知った。もともと深く御指導を賜わったかったので残念である。今はただ、御冥福をお祈りするばかりである。

学生時代、教科教育と学問としての教育学との矛盾に悩んでいた私は、両先生を困らせたことがあった。即ち、将来、学校教育の現場で働くことになる教師を養成する教育学部であるから、各教科を総合的に学ばなくてはならない。あれもこれもと拡散的に



さて、戦前の高等師範学校の伝統を引く広島大学の教育学部は、教育の原理を深く追究する。私は、教育の聖者ベスタロッチの研究で有名な長田新先生に憧れたものである。

また、東北大学の教育学部から分離し独立した、宮城教育大学の初代学長・林竹二先生(ギリシャ哲学)の教育論に啓発されている。私が真に敬愛する教育学者の一人である。小手先の教科を教えるだけでなく、その底にある本質を見抜く教育哲学者でもあった。哲学のない教育は教育の自殺であるとも極論された。また、教育を誤ると国を亡ぼす「教育亡国」という著書もある。

私は、広島国泰寺高校在学中、偶然、書店で見付けた「禅に生きる」という当時の傑僧・澤木興道老師の半生を描いた本との御縁で、愛大入学後、直ぐに「仏教青年会」に入会した。顧問の松本解

雄先生は、親鸞聖人のお念仏を大変喜ばれ、「歎異抄」を講義して下さり、私の親鸞研究の原点となった。

同時に、戦前の台北帝大教授の升田栄先生との出会いは、仏教哲学、特に、業論を説示して下さり、後に教職を辞し、京都の法然上人を仰ぐ佛教大学大学院に進学する大きな機縁となった。そこでは、澤木老師の高弟・村上光照老師の友人で京都大学人文科学研究所助手の荒牧典俊先生を紹介され、佛大院の修士論文「業の主體」に纏めることができた。今も、私の蒙を啓いていて下さっている。

そして、当時、東京で「明静会」を主宰された堀春水先生の大阪講演の直後、私も先生に面談することが許された。正に現代の釈迦如来のように悟りを開かれた先生を目の当たりにして、咄嗟に、「私の因縁を教えて下さい」と口から出た。実は、私の複雑な家庭

事情で、母が大変苦しみ、私の中学生時代、二度自殺未遂したことがあった。多感で心の不安定な中学生にとって強烈な衝撃となり、その後の人生の重い足枷となり、この重圧から解放されたいというのが子供ながらの念願であったから：暫く瞑想された先生は、「罪障消滅の願をもつて仏道に入られたようですね。あなたの輪廻転生の中で殺傷した因縁諸霊の供養をしようという誓いと、真実の世界を知ろうという願いが立っているようですね」と答えられた。その一瞬、閃光に打たれたような感じとともに、今まで抱いてきた全ての疑念から解放されたような歓喜の念が湧き起こった。そして、先生の御指導で「供養」の実践の必要性を説示され、いきなり「世界平和」を叫ぶのではなく、まず身近な足元から調和していく努力をするようにと諭された。その後、縁談も絡んで浄土真宗の僧侶にな

るように勧められた。

竟に、東本願寺派で得度し、その教師修練の最終日、祖師堂にて、無事修行が全うできたことへの感謝と御礼を報告する儀式のとき、私は不思議な神秘的現象を体験した。「唯信鈔文意」に代弁してもらおう。「この信心すなはち仏性なり、仏性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり」と。

その後、供養道に進進したが、長く厳しい道程であった。供養は、お経を称えてその仏の光を因縁諸靈に届け、霊的向上を促す方法である。それは、仏教で説く菩薩道と同じである。菩薩は、梵語 bodhisattva の音写で、菩提薩埵を略した言葉であり、悟りを求める者（求道者）の意味である。その菩薩道的供養道において、折角の縁談も壊れ、西本願寺派へ

転派することとなった。その間、両親を苦しめ、私も体調を崩し、長期入院する試練を味わったが、現在、両親は既に他界し、私は独身のまま喜寿という寂しい老人である。しかし、気力旺盛で、英語学習と大拙博士の英訳・教行信証の解説に集中している。

さて、私も短期間ではあったが小学校教師を体験したので、教育については格別の関心がある。学校教師は教える能動者であり、児童たちは教えられる受動者である。教師は各教科を教えながら、純真な心の彼等の信頼を勝ち取らなければならない。それは、授業という一対一の真剣勝負の場での活動である。機（衆生の心）法（衆生を救う仏の力）一体である。教師と児童と一体である。教師は各教科を教えながら、真理の光を彼等に届けなければならない。私は、「供養」の実践を通して、色々と創造的現象が開かれてくる

ことを実感している。英語学習を通して、日本語の美しさの再発見もその一つであり、イギリスの婦人 Judith Rose さんとの文通も続いており、彼女の初孫 Eoghan（オーエン）君もまもなく三歳になる。手紙の中に彼の写真を同封してくれるのでその生長過程がよくわかる。

また、教師は、菩薩道において、悟りを求めて行く往相回向（自利）と、悟りを完成したら直ちに衆生済度に戻ってくる還相回向（利他）との、力動的な創造的輪廻の詩人でありたい。

今、真理を悟られた釈迦牟尼菩薩の風光を目の当たりにした阿難尊者の驚嘆の言葉が「大無量寿経」にある。

「今日世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして光顔巍巍とましますこと、あきらかなる鏡の淨き影、表裏に暢るがごとし、威容顕曜にして超絶したまえること無量なり、いまだかつて瞻観せず」と。

これを、大拙博士の英訳文を参考にして和訳してみよう。

「今ここに、私は、世に尊いお方の全身に、歓喜と満足が顕われておられるのを拝見します。あなたの表情は晴れやかで淨らかです。あなたのお顔は、澄んだ鏡のように明るく透き通って厳かに輝いています。堂々として尊く、言葉で表現しようがありません。あなたの容貌は燦然として、今までに見た全てのものを限りなく超えています」と。

最後に、大拙博士がこよなく讃嘆された石見の妙好人・浅原才市翁の言葉が遺されている。

虚空世界がみなほとけ わしもそのなか 南無阿弥陀仏

二〇二〇（令和二年）

三月一日（日）

731-0135

広島市安佐南区長束
一丁目一八一五

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~dosokai/>

URLは上記

支部活動、会合、イベント等のスケジュールなど、タイムリーに情報をお知らせします。
同窓会員同士の交流を深めるために、できれば、掲示板を設ける準備をしています。

dosokai.ed.ehime@gmail.com

メールアドレスは上記

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

教育学部同窓会
ホームページへ
アクセスを！

教育学部同窓会
インターネット
開設しています！



愛媛大学演劇研究会



部活動紹介

私たち、愛媛大学演劇研究会は3年生2名、2年生6名の計8人で活動しています。(5月現在、感染症予防のため部活動が全団体一律停止になっているため新入部員は入部できていません)

演劇研究会は、愛媛大学演劇部と合同で公演を年4回行っています。部員のほとんどが大学から演劇を始めて、主役として舞台に立った者もたくさんいます。もちろん演劇は役者だけでは成立しません。役者を支える裏方(=スタッフ)も多種多様に活躍しています。

演劇研究会の活動は演劇にとどまらず、夏には合宿、秋の大学祭では出し物も行っています。ここに書ききれないことも多いので、これを機にもし興味を持っていただけたようであれば本文最後にある連絡先まで気軽にご連絡ください。また、TwitterやYouTubeチャンネルでも公演・イベント情報を随時更新しているので活動をチェックしてみてください。本文次から、活動をより詳しく紹介していきます。



2019. 12月公演
(於：松山市民会館ホール)

〈演劇研究会独自の活動〉



2020. 3月 演劇プログラムの様子
テーマ：想像力と表現力で楽しもう
(於：学童支援施設)

演劇研究会はその活動の大部分を演劇部と合同で行っています。先ほどまでに紹介したものがそれらに当たります。ここからは演劇研究会独自の取り組みを紹介していきます。演劇研究会は「教育学部所属団体(現在)」であり、「演劇を通して子どもたちと関わる。教育的活動を行う。」といったことを大事にしています。昨年度までの活動を紹介しますと、幼稚園への訪問及び童話劇発表、学童保育団体での演劇プログラム企画・支援員としてのボランティアを行いました。普段接することがない子どもさんたちと関わることは、私たち大学生にとってもたくさんの学びになります。こういった活動でやはり嬉しいことは、子どもたちがとにかく真剣に且つ楽しく活動してくれることです。これは他の部活・他の劇団でもなかなか味わえない「喜び・やりがい」であり魅力であると考えています。この時忘れてはいけない大切なことは「誰かに支えられているということ」であり「感謝の気持ち」です。私たちが活動できるのも大学や外部団体の支えがあってこそです。そういった「感謝」の気持ちを大切にできる団体であり続けたいと思います。

〈学童支援員としての活動〉

皆様もご存じのこととと思いますが、本文執筆中の現在、コロナウイルスの影響が全国的に広がっており、部活動は停止、小学校や中学校も緊急で休校措置を取っていました。そんな時発生するのが、「子どもを預けられる場所の確保」の問題です。演劇研究会がお世話になっている「まちのがっこう」という学童支援団体でも緊急の対応をされていました。私たち演劇研究会でも「部活動が無い時間を使って何かできないか？」と考え、学童支援員としてこの3月・4月は有志で活動させていただくこととなりました。

演劇研究会ということもあり、演劇で培ったコミュニケーション能力を駆使してたくさん子どもたちと仲良くなれました。共に学び、共に遊ぶことで子どもたちが持つ力を見せつけられました。本当に楽しいんですよ。長い時間のボランティアの日は疲れるときもあります。遊びに遊んで時には芝居の稽古くらい疲れるときもあります。でもそれ以上に「また来たい」と思えるんです。どの部活やどの職種でも必ず「夢中になれること」や「やりがい」を見つけられるのだと思います。私は大好きな演劇をしながら、子どもたちと夢中になれることができる演劇研究会にすることができ、良かったと思います。不安定な状況にある新入生がぜひこういった各々「居てよかった」と思える場所に巡り合えることを心から願っています。



2019. 4月
学童支援員ボランティア
活動の様子



〈今年度の活動予定〉

本来は4月に新入生歓迎公演を行う予定でしたが、状況により見送りとなりました。正直辛いですがそれはどの団体も同じなので、こんなときこそ協力していきたいと思っています。今年の公演予定は10月、12月です(於：大学会館3F)。4月の悔しさをバネにより一層お客様を楽しませることのできる舞台を皆で作っていききたいと思います。学祭では毎年好評のお付け屋敷とダーツを行う予定です。その他、教育活動にも一層力を入れてまいりたいと思います。これからも愛媛大学演劇研究会をよろしく願いいたします。

活動日：月・火・木・金・土
場所：大学会館3F
主な活動：芝居稽古、演劇プログラム企画

TEL:080-5624-0038 (制作部)
090-4147-3246 (代表)
Twitter : @engeki_euni
e-mail:engeki_e2010@yahoo.co.jp
愛媛大学演劇研究会
代表 北森 瑞希

愛媛大学校友会では、学生サークルへの援助や、就職活動旅費の補助、学生図書の寄贈、新社会人の歓迎会など、様々な支援事業を行っていますので、その一部をご紹介します。

【先輩に学ぶ 先輩学】

本学卒業（修了）後、愛媛県内で活躍されている先輩を現役の愛大生が訪問取材し、先輩の生の声を校友会ホームページと校友会報に掲載しています。

『先輩に学ぶ』は、様々な業種に就かれている卒業生同士や後輩学生との交流を図るとともに、校友会会員相互のネットワークを拡大させることを目的としています。

今回は過去のインタビューの一部を転載いたします。

* - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - *

「愛媛県立みなら特別支援学校」 (H31. 2取材時)



- ◆藤井 実季さん (2016. 3月 教育学部特別支援教育教員養成課程 発達障害コース 卒業)
- ◆岸田 直也さん (2014. 3月 教育学研究科特別支援教育専攻 特別支援学校教育専修 修了)

特別支援学校の小学部で働くお二人の先生。
日々工夫をこらしながら、子どもたちの健やかな成長を支えています。

Q.学生時代に経験したことで役立っていることはありますか。

〈藤井〉

週1、月1ペースで発達障がいの子たちに向けた活動をゼミでしてきたことはとても今の授業などに繋がっていると思います。見通しを持てるようにスケジュールを作ることや、子どもたちに必要なことなど、様々なことを大学の先生に教わったことは自分の基礎になりました。大学生の間に関わった子どもたちから色々なことを教えてもらって、経験値として積みあがってきたものがあるとも思います。

〈岸田〉

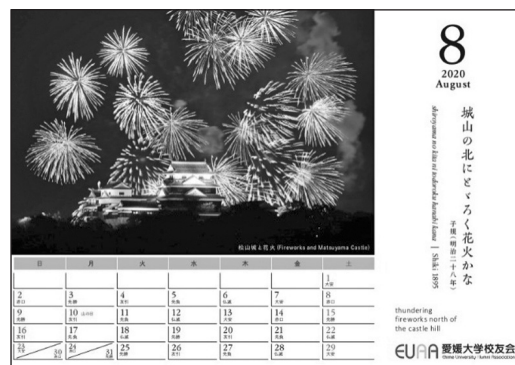
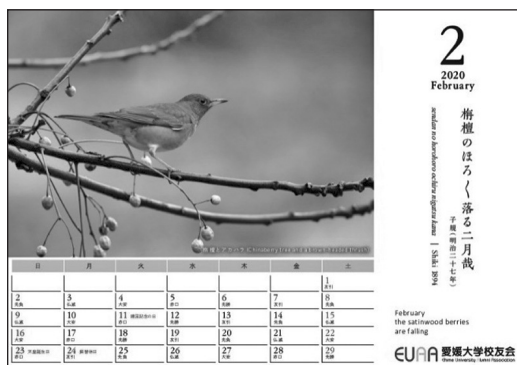
私も月1で発達障がいの子を集めて社会性を磨くような学習を考えて、大学の先生にみていただく、というような活動をしていました。保護者の方も詳しい方が多くて、ご指導いただいて、より良いものにしていきました。その時に記録したノートは今も見返しますし、とても役に立っています。また、私は学部生の時バンドをやっていたので、子どもと一緒にギターを弾くことや、学習発表会用の音源を自分で作ったり編集することができます。仕事をしていて、音楽をやってきてよかったと思うことが多々あります。

全体は校友会ホームページからご覧ください。→ <http://koyu.ehime-u.jp/koyu/voice/2019/04/post-12.html>

* - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - - *

【子規俳句カレンダー作成】

校友会では、愛媛大学や四国、松山の風景などの写真に、郷土が誇る俳人正岡子規の俳句を載せて卓上サイズのカレンダーを作成しています。校友会に会員情報をご登録いただいた卒業生で、校友会ホームページから応募いただいた皆様には先着でプレゼントしております。2020年版を少しご紹介いたします。



放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二〇年十月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二〇年六月十日（水）～

九月十五日（火）

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2020年度10月入学生募集中！

（2020年9月15日まで）

問合せ先 愛媛学習センター
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp 0120-864-600

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。

第11回「愛媛大学ホームカミングデー」開催のお知らせ



1. 日 時：令和2年11月14日(土)

2. 会 場：愛媛大学城北キャンパス

ホームカミングデーは、卒業生の皆様や退職された教職員の方々に大学の現状をお伝えし、交流を深める目的で実施しています。

詳細につきましては、改めてご連絡いたします。卒業生の皆様のご参加をお待ちしています。

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

① 一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっております。

② 二年ごとの更新は、煩いので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四

送り先 〇七九〇一八五七七

松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。

| | | | |
|---|--------|------------------|--|
| 払込取扱票 | | 通常払込料金加入者負担 | |
| 02 | 016407 | 2754 | |
| 愛媛大学教育学部同窓会 | | 会費 | |
| ☐ 同窓会懇親会会費
☐ 会報送料
☐ 寄付 | | 年 辛
() | |
| 振替口座番号
〇一六四〇一七二七五四 | | 送り先
〇七九〇一八五七七 | |
| 松山市文京町三
愛媛大学教育学部同窓会 | | 様
印 | |

用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒に皆様へお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

令和2年度 支 部 長 会 報 告

今年度の支部長会は6月6日(土)に校友会サロンにて開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う愛媛大学BCP（事業継続計画）に従い、中止としました。

予定していた下記議案につきましては、書面議決方式により承認となりました。

【書面議決議題】

- 1号議案 令和2年度役員改選（案）
- 2号議案 令和2年度同窓会役員表（案）
- 3号議案 令和元年度事業報告
- 4号議案 令和元年度決算報告
- 5号議案 令和2年度事業報告（案）
- 6号議案 令和2年度予算（案）
- 7号議案 令和2年度支部助成金（案）

【確認資料】

- 資料1 本部役員住所・連絡先
- 資料2 会報原稿執筆予定表
- 資料3 支部活動支援金交付要綱及び様式
- 資料4 第17回教育学部同窓会懇親会中止のお知らせ



新 顧 問 紹 介



本年度より、4年間教育学部同窓会にご尽力いただいた佐野栄先生に代り、教育学部長に就任された国語教育講座所属^{こすけがわがんだ}小助川元太先生に顧問をお願いすることになりました。先生のご専門は「中世文学・説話・軍記・仏教文学」です。（愛媛大学HPより）昨年度までは附属中学校の校長を兼任されていました。

祝・叙勲

（令和二年四月二十九日）

☆瑞宝双光章

教育功勞

長岡 和人 殿

愛南町城辺甲三八二〇の五

（昭和四十七年卒）

教育功勞

原 広 殿

今治市玉川町小鴨部甲九の三二

（昭和四十七年卒）

教育功勞

平野 忠司 殿

松山市溝辺町甲一四三の一

（昭和四十八年卒）

◆お詫びと訂正

会報一二九号「祝・叙勲」欄の教育功勞・叙勲者名の記載に誤りがありました。

（誤）小田 義朗 殿

（正）小田 芳朗 殿

小田様及び会員の皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。

→新型コロナウイルス感染拡大のため中止（または書面議決方式による）

令和元年度 事業報告

令和2年度 事業計画(案)

| | | | | | |
|------------|-------------------|---|------------|-------------------------------|--|
| 4. 4 (木) | 平成31年度入学式 | 学部生 169名 院 生 22名
計 191名 | 4. 6 (月) | 令和2年度入学式 | 学部生 167名 院 生 29名
計 196名 |
| 4. 12 (金) | 平成30年度会計監査 | 監査実施 | 4. 10 (金) | 第2回令和元年度会計監査 | 監査実施 |
| 5. 10 (金) | 第1回常任理事会 | 第1回理事会提出議題審議（会則改正等） | 5. 8 (金) | 第1回常任理事会 | 第1回理事会提出議題審議 |
| 5. 25 (土) | 第1回理事会 | 平成30年度事業、決算報告
令和元年度事業計画案及び予算案審議
会則改正案について審議 | 5. 23 (土) | 第1回理事会 | 令和2年度本部役員案審議
令和元年度事業、決算報告
令和2年度事業計画案及び予算案審議
第17回同窓会懇親会案について審議 |
| 6. 8 (土) | 支部長会 | 令和元年度本部役員案報告
平成30年度事業、決算報告
令和元年度事業計画案及び予算案審議
会則改正案審議 | 5. 30 (土) | 同窓会懇親会世話人会 | 第17回教育学部同窓会について |
| 6. 12 (水) | 第1回編集委員会 | 会報128号 校正 | 6. 6 (土) | 支部長会 | 令和2年度本部役員案審議
令和元年度事業、決算報告
令和2年度事業計画案及び予算案審議
第17回同窓会懇親会案について審議 |
| 7. 1 (月) | 同窓会報128号発行 | 8,000部 | 6. 10 (水) | 第1回編集委員会 | 会報130号 校正 |
| 7. 10 (水) | 第2回編集委員会 | 会報129号の編集 | 7. 1 (水) | 同窓会報130号発行 | 会報発送作業（8,000部） |
| 7. 19 (金) | 支部活動支援金申込締め切り | 各支部において教育学部名で後援・
賛助できるもの | 7. 8 (水) | 第2回編集委員会 | 会報131号の編集 |
| 7. 26 (金) | 第2回常任理事会 | 第2回理事会提出議題審議 | 7. 17 (金) | 第2回常任理事会 | 第2回理事会提出議題審議
支部活動支援金申込締め切り |
| 8. 3 (土) | 第2回理事会 | 支部活動支援金及び後期事業報告 | 8. 1 (土) | 第2回理事会 | 支部活動支援金及び後期事業報告 |
| 11. (未) | 学部サポーター制による講義 | 教育学部卒業生による講演 | 8. 22 (土) | 第17回教育学部同窓会懇親会 | 会員相互の懇親会 |
| 11. 9 (土) | 第3回常任理事会 | 事業進捗状況及び懇親会について | 11. 14 (土) | 第11回愛媛大学ホームカミングデー
第3回常任理事会 | 教育学部同窓会参加
事業進捗状況及び懇親会について |
| 11. 11 (月) | 第10回愛媛大学ホームカミングデー | 教育学部同窓会参加 | 11. (未) | 学部サポーター制による講義 | 教育学部卒業生による講演 |
| 12. 20 (金) | 第4回常任理事会 | 第3回理事会提出議題審議 | 12. 18 (金) | 第4回常任理事会 | 第3回理事会提出議題審議 |
| 1. 17 (金) | 第3回編集委員会 | 会報129号 校正 | 1. 15 (金) | 第3回編集委員会 | 会報131号 校正 |
| 1. 18 (土) | 第3回理事会 | 年間事業の反省 新年度諸計画について | 1. 23 (土) | 第3回理事会 | 年間事業の反省 新年度諸計画について |
| 2. 1 (金) | 会報129号発行 | 8,000部 | 2. 1 (月) | 会報131号発行 | 会報発送作業（8,000部） |
| 3. 6 (金) | 第5回常任理事会 | 令和元年度事業反省、次年度重点活動
目標設定について | 3. 5 (金) | 第5回常任理事会 | 令和元年度事業反省、次年度重点活動目標設定について |
| 3. 24 (火) | 令和元年度卒業式(武道館) | 学部生 175名 院 生 40名
計 215名 | 3. 24 (水) | 令和2年度卒業式
(ひめぎんホール) | 学部生 名 院 生 名
計 名 |

令和元年度 決算書

(収入の部)

(単位：円)

| 費 目 | 本年度予算 | 本年度収入 | 増 減 | 摘 要 |
|------------|-----------|-----------|----------|-------------------------|
| 1. 会 費 | 3,820,000 | 3,820,000 | 0 | 予定入会者
(191名) @20,000 |
| 2. 寄 付 | 200,000 | 220,000 | 20,000 | 寄付金等 |
| 3. 旅費等返金 | 0 | 25,800 | 25,800 | 旅費・会議費返金等 |
| 4. 雑 収 入 | 20,000 | 0 | △ 20,000 | ホームカミングデー校友会補助 |
| 5. 懇親会助成返金 | 0 | 0 | 0 | |
| 6. 利 息 等 | 0 | 1,185 | 1,185 | |
| 7. 繰 越 金 | 639,638 | 639,638 | 0 | |
| 計 | 4,679,638 | 4,706,623 | 26,985 | |

(支出の部)

| 費 目 | 本年度予算 | 本年度支出 | 増 減 | 摘 要 |
|-------------|-----------|-----------|----------|-------------------|
| 1. 会 議 費 | 150,000 | 103,498 | 46,502 | 支部長会・理事会等 |
| 2. 旅 費 | 450,000 | 329,600 | 120,400 | 支部長会・理事会等 |
| 3. 印 刷 費 | 1,350,000 | 1,118,200 | 231,800 | 会報年2回(封筒印刷込) |
| 4. 通 信 費 | 300,000 | 345,783 | △ 45,783 | 会報発送、連絡費 |
| 5. 給 与 費 | 800,000 | 800,000 | 0 | |
| 6. 備 品 費 | 30,000 | 24,178 | 5,822 | プリンター機器 |
| 7. 消耗品費 | 90,000 | 65,700 | 24,300 | 封筒、ラベル、コピー代等 |
| 8. 支部助成費 | 450,000 | 397,930 | 52,070 | |
| 9. 卒業記念費 | 300,000 | 326,700 | △ 26,700 | 電波時計付フォトスタンド |
| 10. 国際交流基金 | 200,000 | 200,324 | △ 324 | |
| 11. 懇親会補助費 | 70,000 | 56,000 | 14,000 | |
| 12. 支部活動支援費 | 210,000 | 101,000 | 109,000 | 芸能・文化支援 |
| 13. 学部活動支援費 | 100,000 | 67,880 | 32,120 | 学部サポーター活動支援等 |
| 14. 予 備 費 | 100,000 | 75,151 | 24,849 | 会長会参加費、玄関環境整備費等 |
| 15. 雑 費 | 79,638 | 58,428 | 21,210 | 学生アルバイト代、事務手伝い謝礼等 |
| 計 | 4,679,638 | 4,070,372 | 609,266 | |
| | | 残 高 | 636,251 | (次年度への繰り越し) |

令和2年度 予算書(案)

(収入の部)

(単位：円)

| 費 目 | 本年度予算 | 昨年度予算 | 増 減 | 摘 要 |
|----------|-----------|-----------|---------|--------------------------|
| 1. 会 費 | 3,920,000 | 3,820,000 | 100,000 | 本年度入会者
(196名) @20,000 |
| 2. 寄 付 | 220,000 | 200,000 | 20,000 | 寄付金・送料等 |
| 3. 雑 収 入 | 20,000 | 20,000 | 0 | 校友会補助・利息等 |
| 4. 繰 越 金 | 636,251 | 639,638 | △ 3,387 | |
| 計 | 4,796,251 | 4,679,638 | 116,613 | |

(支出の部)

| 費 目 | 本年度予算 | 昨年度予算 | 増 減 | 摘 要 |
|-------------|-----------|-----------|----------|--------------------|
| 1. 会 議 費 | 150,000 | 150,000 | 0 | 支部長会・理事会等 |
| 2. 旅 費 | 400,000 | 450,000 | △ 50,000 | 支部長会・理事会等 |
| 3. 印 刷 費 | 1,350,000 | 1,350,000 | 0 | 会報年2回(封筒印刷込) |
| 4. 通 信 費 | 350,000 | 300,000 | 50,000 | 会報発送・連絡費 |
| 5. 給 与 費 | 800,000 | 800,000 | 0 | |
| 6. 備 品 費 | 50,000 | 30,000 | 20,000 | |
| 7. 消耗品費 | 90,000 | 90,000 | 0 | ラベル・封筒・コピー代等 |
| 8. 支部助成費 | 420,000 | 450,000 | △ 30,000 | |
| 9. 卒業記念費 | 350,000 | 300,000 | 50,000 | 電波時計付フォトスタンド |
| 10. 国際交流基金 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 11. 懇親会補助費 | 170,000 | 70,000 | 100,000 | 運営費・チラシ印刷代 |
| 12. 支部活動支援費 | 210,000 | 210,000 | 0 | 芸能・文化支援 |
| 13. 学部活動支援費 | 100,000 | 100,000 | 0 | 学部サポーター活動支援等 |
| 14. 雑 費 | 56,251 | 79,638 | △ 23,387 | 学生アルバイト
事務手伝い謝礼 |
| 15. 予 備 費 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 計 | 4,796,251 | 4,679,638 | 116,613 | |

※△は減額を示す

令和2年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

| | | | | | | | | |
|-----|-------|-----------------|---------|---------|---------|---------|------|---------|
| 本 部 | 顧 問 | 小助川 元 太・奥 定 一 孝 | | 監 事 | 矢 野 裕 司 | | 常任幹事 | 阿 部 修 一 |
| | 会 長 | 高 橋 治 郎 | | | 相 原 孝 裕 | | | |
| | 副 会 長 | 立 入 哉 | 山 下 雅 司 | 村 上 朋 子 | 菅 田 顯 | 渡 邊 恵 理 | | |
| 部 | 理 事 | 青 野 多喜夫 | 長 野 照 道 | 山 本 千鶴子 | 満 田 泰 三 | 村 上 嘉 一 | | |
| | | 和 田 和 子 | 阿 部 晋 | 垂 水 葉 子 | 後 藤 陽 三 | 辻 井 芽美子 | | |
| | | 白 石 久美子 | | | | | | |
| | | 石 井 圭 | 吉 井 美 貴 | 金 築 治 美 | 山 本 大 介 | 和 田 清 寛 | | |
| | | 高 橋 祐 貴 | 三 棟 優 子 | | | | | |

| | | | | | | | |
|------|--------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|
| 県内支部 | 支 部 名 | 支 部 長 | | 副 支 部 長 | | 副 支 部 長 | |
| | 川之江・新宮 | 高 橋 竜 貴 | 金生第二小 | 越 村 慎 治 | 妻 鳥 小 | 篠 原 隆 輔 | 新宮小・中 |
| | 伊予三島 | 野 村 浩 | 三島東中 | 高 木 淳 | 寒 川 小 | 加 地 孝 昌 | 中之庄小 |
| | 土 居 | 星 野 尚 子 | 長 津 小 | 高 橋 和 紀 | 土 居 小 | 三 好 恵 子 | 小富士小 |
| | 新 居 浜 | 中 野 久 | 中 萩 小 | 高 橋 美 鈴 | 泉 川 小 | 井 川 昭 二 | 垣 生 小 |
| | 西 条 | 秋 山 恵 美 | 橘 小 | 久 門 宣 | 神 拝 小 | 高 木 リ エ | 橘 小 |
| | 東予・周桑 | 木 原 敏 彦 | 国 安 小 | 岸 田 英 之 | 丹 原 小 | 千 羽 達 也 | 楠 河 小 |
| | 今 治 | 藤 原 勝 彦 | 清 水 小 | 亀 田 義 彦 | 立 花 小 | 山 口 峰 松 | 桜 井 小 |
| | 今治・越智 | 脇 阪 順 三 | 伯 方 小 | 藤 原 愛 明 | 上 浦 小 | 菅 征 永 | 関 前 中 |
| | 北 条 | 原 佳 嗣 | 正 岡 小 | 桐 山 真 美 | 浅 海 小 | 宇 高 淑 文 | 立 岩 小 |
| | 松 山 | 尾 脇 康 資 | 味 生 小 | 大久保 礼 子 | 中 島 小 | 田 中 祐 二 | 椿 中 |
| | 東 温 | 井 原 聡 博 | 拝 志 小 | 田 井 通 臣 | 北吉井小 | 森 本 久 美 | 川 上 小 |
| | 伊 予 | 伊 達 泰 明 | 砥 部 小 | 大 森 茂 樹 | 北伊予小 | 山 下 吉 信 | 広 田 小 |
| | 上 浮 穴 | 飯 王 繁 嘉 | 美 川 小 | 寺 本 栄 一 | 畑野川小 | 村 上 正 | 久 万 中 |
| | 大 洲 | 小 川 幸 雄 | 菅 田 小 | 竹 本 親 由 | 喜 多 小 | 森 岡 也寸志 | 大洲東中 |
| | 喜 多 | 大 野 弘 玄 | 五十崎小 | 元 永 和 孝 | 小 田 小 | 柴 川 一 也 | 立 川 小 |
| | 八 幡 浜 | 梶 原 章 代 | 白 浜 小 | 脇 坂 耕 三 | 愛 宕 中 | 河 野 靖 | 愛 宕 中 |
| | 西 宇 和 | 竹 上 正 也 | 九 町 小 | 藤 堂 玄 人 | 大 久 小 | 大 石 友 紀 | 九 町 小 |
| | 西 予 | 滝 澤 治 | 三 瓶 中 | 堀 内 良 之 | 田之筋小 | 賀 原 浩 文 | 多 田 小 |
| | 宇 和 島 | 矢 野 淳 一 | 鶴 島 小 | 中 村 米 貴 | 清 満 小 | 山 崎 厚 弘 | 蔭 淵 小 |
| | 北 宇 和 | 古 谷 孝 | 愛 治 小 | 河 野 こずえ | 愛 治 小 | 酒 井 隆 仁 | 松野西小 |
| | 南 宇 和 | 若 松 隆 仁 | 僧 都 小 | 片 山 新 也 | 長 月 小 | 清 水 美 和 | 久 良 小 |
| | 附 属 | 石 川 圭 | 附属特支 | | | | |

| | | | | | | |
|------|-----|---------|--|---------|--|---------|
| 県外支部 | 東 京 | 成 見 由紀子 | | 森 孝 枝 | | |
| | 京 都 | 河 野 直 樹 | | | | |
| | 大 阪 | 神 垣 鉄 雄 | | 本 宮 久 | | 杉 山 容 子 |
| | 神 戸 | 平 山 昇 | | | | |
| | 岡 山 | 春 名 貞 和 | | 飯 綱 義 明 | | 近 藤 立 志 |

| | | | | | | |
|------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 編集委員 | 菅田 顕 | 阿部 晋 | 山下 雅司 | 渡邊 恵理 | 村上 朋子 | 阿部 修一 |
|------|------|------|-------|-------|-------|-------|

寄付者名

令和2年1月～6月

加河宮松近保長寺宮鹿児土渡永後後萩新檜山上小村昌芳之本川森宮安橋水
藤合田本藤科井尾崎島島居部木藤藤山田本島田田之内宮端岡川藤本川
成義富理小敏英弓敏泰愛タノ莊瞳安ミツ満常奈忠礼一敏輝春淳龍景
子淳行子香恵合幸子聖博正子シノ郎子隆ホ良男光子男志美治一夫郎雄怜三

敬弔

(物故会員)

(死亡年月日)

(氏名)

2・1・6 2・1・6 2・1・2 1・12・30 1・12・29 1・12・22 1・12・17 1・12・15 1・12・7 1・12・3 1・11・26 1・11・24 1・11・23 1・11・20 1・11・19 1・10・30 1・10・3 1・9・4

(昭30・愛大) 山内功 (昭18・愛師二) 馬越義隆 (昭28・愛大) 曾我定一 (昭30・愛大) 高山悟 (昭32・愛大) 西村康也 (昭16・女師二) 小野咲子 (昭24・愛大) 鴻上安博 (昭30・愛大) 西山秋久 (昭37・愛大) 久保多磨夫 (昭21・青師) 丹下ミヨ子 (昭35・愛大) 大川正太郎 (昭31・愛大) 富永安保 (昭17・青師) 尾崎光正 (昭26・愛師) 藤田行信 (昭25・青師女) 渡邊昌子 (昭41・愛大) 光法健 (昭23・愛師女) 雲井美智子 (昭24・愛師) 元川義信 (昭24・愛師)

2・4・24 2・4・22 2・4・7 2・3・30 2・3・22 2・3・19 2・3・18 2・3・17 2・3・13 2・3・10 2・3・7 2・2・29 2・2・23 2・2・17 2・2・4 2・1・28 2・1・27 2・1・27 2・1・20 2・1・18 2・1・11

(昭14・県師二) 山本孝 (昭24・青師女) 田坂倫子 (昭36・愛大) 塩梅陽一 (昭30・愛大) 皆川亮一 (昭23・愛師) 近藤哲郎 (昭24・愛大) 西岡哲義 (昭29・愛大) 藤田大典 (昭17・県師二) 鎌田一男 (昭37・愛大) 芝共恭 (昭27・愛大) 青井正史 (昭23・愛師) 都築辰蔵 (昭28・愛大) 宮岡賢二郎 (昭31・愛大) 長橋正 (昭30・愛大) 大野勝美 (昭24・愛師) 薦田弥生 (昭37・愛大) 藤井信 (昭34・愛大) 菅孝夫 (昭28・愛大) 森茂 (昭30・愛大) 近藤淑子 (昭23・愛師) 石城弘 (昭24・青師) 河野博徳 (昭24・青師)

同窓会事務局からのお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、

8月22日(土)開催予定の
第17回愛媛大学教育学部同窓会懇親会は
中止 とします。

楽しみにしておられた会員の皆様！ 誠に申し訳ありません。
今後のことにつきましては、令和3年2月発行予定の会報
131号でお知らせいたします。



※同窓会への御寄附ありがとうございました。

第 17 回

愛媛大学 教育学部

同窓会懇親会

●日時

令和2年8月22日(土)

12:00～15:00

●場所

ANA クラウンプラザ 松山

ダイヤモンドホール

〒790-8520

松山市一番町3丁目2-1

TEL:089-947-8302

●会費 6,000 円

【申込

愛媛大学教育学部同窓会事務局

〒790-8577 松山市一番町3

TEL:089-927-9383

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com



皆様のご参加を心よりお待ちしております

会員写真館



会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写真を事務局にお送りください。



教育学部玄関横（早咲きの桜）

毎年多くの教育学部卒業生を見送っていた教育学部玄関横の早咲きの桜です。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で卒業式が中止となり、見送る卒業生がいない中、教育学部卒業生にエールを送るかのように咲き誇っていました。



観光客の訪れを待つ道後温泉の人力車



一人観光客を待つ松山城の嘉明くん

いつも観光客で賑わう道後温泉や松山城ですが、今は我慢の時とばかりに新型コロナウイルス感染の終息を待っています。（松山城は改修着手前の写真です。嘉明くんは、中央奥にいます。見つけてください。）

文芸欄

幸田光温先生は、昭和31年に教育学部を卒業後、広島市内の中学校に赴任し、教壇に立ちながら絵画・俳句・短歌・郷土の研究に邁進されました。会員の皆様の要望を受け、先生の描いた絵を事務局で選ばせていただきました。

引用 寄贈本「絵画・俳句・短歌・郷土の研究……
教師 幸田光温 七十八年のあしあと」より抜粋



見下ろす（水彩）



三次の町並み（淡彩）



可部・並ぶ蔵（水彩）